

愛知医科大学 学報



開院記念テープカット（関連記事2頁）

＝ 第134号 ＝

2014. 4月

愛知県長久手市岩作雁又1番地1

〒480-1195

学校法人 愛知医科大学

愛知医科大学ホームページアドレス

www.aichi-med-u.ac.jp

■ 主な目次 ■

新病院開院記念行事	2
平成26年度入学式	7
平成25年度卒業式	9
平成26年度予算大綱	13
就任ごあいさつ	17
バス新規路線運行開始	23
大型研究費の更新	25
Student Doctor 認証式	27
退職を迎えて	34
新病院への患者移送を無事完了	37
教育・研究最前線	50

祝・開院 愛知医科大学

愛知医科大学新病院の開院を記念して、平成26年4月11日（金）から13日（日）の3日間にわたり、「新病院開院記念行事」が挙行されました。

本行事は、今春5月9日の開院を祝し、広く関係者に新病院を披露するとともに、本学及び新病院を紹介することを目的として行われ、総勢3,000名の方々にご参加頂きました。

新病院の建設は、開学以来最大の事業でありましたが、本事業を無事に終え、新たな一步を踏み出すことができました。皆さま方の温かい祝福に心から感謝申し上げます。

平成26年4月11日（金）には、学外関係者の方々総勢450名をお招きして、除幕式・開院式・特別内覧会・祝賀会がそれぞれ執り行われました。

まず、式典に先立ち9時20分から、新病院玄関横において、ご寄附を頂いた約100名をお招きして、寄附者銘板除幕式を行いました。

続いて、10時から、会場を新病院1階オアシスホールに移して、開院式を執り行いました。

三宅養三理事長から「多くの方々の支援を得て、新病院が成就できたことに感謝の意を表するとともに、本日この時点で日本一の施設として完成することができた。」とあいさつがありました。

次に、大村秀章愛知県知事からご祝辞を頂き、ドクターヘリの全国展開にご尽力されたエピソードも披露されながら、新病院に対して地域に根ざした特定機能病院として、今後の更なる活躍を期待するとのお言葉を頂きました。

ご来賓のあいさつを頂いた後、大村県知事、石井芳樹愛知県議会議員、吉田一平長久手市長、加藤延夫前理事長、三宅理事長、佐藤啓二学長、野浪敏明病院長の7名による記念テープカットが行われ、会場は温かい拍手で包まれました。

開院式後、10時20分からは愛知医科大学新病院のお披露目として、特別内覧会が開催されました。



あいさつする三宅理事長



祝辞を述べられる大村県知事



除幕参加者による記念撮影



記念テープカットを行う来賓の方々和本学関係者

左から野浪病院長、佐藤学長、三宅理事長、大村県知事、石井県議会議員、吉田市長、加藤前理事長

新病院「開院記念行事」

特別内覧会では、病室、手術室、リハビリテーションセンター、プライマリケアセンター、高度救命救急センターなどをご覧頂き、大きな関心を抱いて頂いた様子でした。また、新病院で導入する患者案内システムNAVITについては、たくさんのご質問を頂き、高く評価頂きました。

特別内覧会終了後は、会場を体育館に移し、祝賀会が執り行われました。

祝賀会では、濱口道成名古屋大学総長を始め、石井県議会議員、吉田長久手市長からそれぞれご祝辞を頂きました。

ご祝辞の後には、三宅理事長から設計・施工業者の株式会社山下設計、鹿島建設株式会社及び株式会社シーエナジーにそれぞれ感謝状の贈呈がありました。

その後、ご来賓22名の方々にご登壇頂き、盛大に鏡開きを行って頂きました。ご登壇者を代表して、寺野彰日本私立医科大学協会会長の乾杯で歓談となりました。会場は、愛知室内オーケストラの奏でる音色に包まれ、和やかなひと時となりました。

最後に、中締めとして、野浪病院長からあいさつを申し上げ、お開きとさせて頂きました。

多数の皆さまにご臨席頂くとともに、祝花や祝電なども多数頂き、皆さま方の温かい祝福とご理解ご協力で改めて心から感謝申し上げます。

また、4月12日(土)・13日(日)には、医療関係者を始め、近隣住民、インターネットで応募された一般の方など約2,500名の方々をお招きして一般内覧会を開催し、特別内覧会と同じコースを見学して頂きました。

両日とも多数の方々にご参加頂き、新病院への関心の高さを窺い知ることができました。

— 祝辞を述べられるご来賓の方々 —



濱口名古屋大学総長



石井県議会議員



吉田長久手市長



寺野日本私立医科大学協会会長



祝賀会での鏡開き

新病院概要

設置場所	愛知県長久手市岩作雁又1番地1
敷地面積	100,370.71m ²
建物概要	面積 86,662.44m ²
	構造 鉄骨造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造(基礎免震)
	階数 地下1階、地上15階
構成	供給部門を中心とする地階 外来、中央診療、管理の各部門を中心とする低層階(1~5階) 病棟階(6~14階)
	病床数 800床(一般病床) うちICU系:75床
手術室数	19室



新病院フォトグラフ



航空写真



プライマリケアセンター



新病院外観



2階ロビー



オアシスホール (エントランス) ①



診察室前待合



オアシスホール (エントランス) ②



外来待合 (小児科)



GICU



特別4床室 (14階)



リハビリテーションセンター



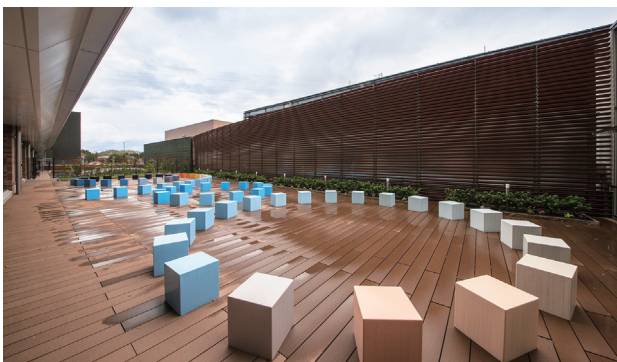
特別室A (14階)



屋上リハビリテーション庭園



ライトアップされた新病院①



屋上庭園



ライトアップされた新病院②

新病院施設紹介

高度な医療機能



ハイブリッド手術室

血管撮影装置を手術室に設置することにより、IVRと外科的手術を組合せて、大動脈ステントグラフトや経カテーテル大動脈置換術など低侵襲で高度な治療ができます。



高精度放射線治療装置 (True Beam STx)

がんをピンポイントに照射する定位放射線治療や強度変調放射線治療 (IMRT)、画像誘導放射線治療 (IGRT) などを短時間に、かつ高精度で行うことが可能です。

施設に備える災害対応の仕組み

拠点災害病院として、BCP(事業継続計画)を準備しています。

- 災害時には、エントランスホールなどの共用部が、トリアージや応急処置スペースとなるだけでなく、院内・廊下の壁には医療ガス供給設備(酸素・吸引)を備え、外来診察には無停電電源を確保しています。
- 地下1階床下には、5種類の免震装置を合計158台導入し、地震の揺れを最大4分の1まで抑えることができます。
- 立体駐車場の地下には井戸水を貯める水槽を設置し、災害時には浄水装置で飲用水に代用ができます。また、電気配線、電話回線、インターネットの無線LANも二重化し、緊急時に備えています。



天然ゴム系積層ゴム

生活時間の最大活用 (患者案内システムNAVIT)

受付



新規患者さんは初診受付で、再来患者さんは再診受付機で、NAVITを受け取り、フォルダーに入れて、首からかけるなど携帯してください。

診察待ち



診察順番が近くなると、NAVITが診察室付近への案内を表示。それまでは喫茶・レストラン・売店・健康情報室等でお待ち頂くなど、待ち時間を有効にお使い頂けます。

診察



診察の順番になったら、NAVITで診察室への入室をご案内します。診察室番号を確認してお入りください。診察終了後は、ブロック受付で会計の受付をしてください。

ブロック会計 直結の駐車場に



診療費の計算ができましたら、NAVITがお知らせします。お薬のない方は、自動精算機で精算し、そのフロアから直結した駐車場へとお帰り頂けます。

平成26年度愛知医科大学入学式

医学部・看護学部入学式



平成26年度入学式が、平成26年4月4日（金）午前10時から大学本館たちばなホールにおいて挙行されました。【写真】

式は、君が代斉唱に始まり、医学部117名、看護学部108名計225名の新入学生を代表して医学部の小塚知美さんから「学則並びに諸規則を守り、先生方のご指導に従い、本学学生としての自覚を持ち勉学に励むことを誓います。」と宣誓が行われました。

その後、佐藤啓二学長から告辞が述べられ、続いて、来賓の三宅養三理事長、浅井富成医学部父兄後援会会長及び大輪芳裕医学部同窓会会長代理同窓会理事からそれ

ぞれ祝辞が述べられました。

最後に看護学部の中川千紗都さんから「これから、医療に携わろうとしている私たちにとっては、人との関わりがとても大切になると思います。多くの出会いを大切にしつつ、個々の人々が抱える思いや気持ちを感じ取り、理解することに努めてください。」と歓迎の辞が述べられ午前10時40分ごろ式は終了しました。



宣誓を述べる小塚さん



中川さんからの歓迎の辞

告 辞

学 長 佐 藤 啓 二



愛知医科大学は、今春医学部117名、看護学部108名の新入生を迎えました。

長く険しい坂道を登ってこられて、本学に入学をされた皆さん、ご入学おめでとうございます。

皆さんの入学に当たり、コペルニクス（1473～1543）と宇宙、人間の存在意義に触れて、医学を学ぶことは、人間の尊厳を具現化することであるという話をさせていただきます。

神は宇宙を作り、その中心に地球を据え、人間を特別な存在であると考えてきたのが、天動説でありました。神をたたえる宗教的な背景もあったと思います。

しかしながら、16世紀初頭、コペルニクスは、等速円運動や離心円モデル等について科学的に検証した結果、地球は太陽の周りを回る惑星であるという地動説を提唱しました。

これによって、人間は宇宙の中心に存在しているとい

う虚栄心が打ち碎かれることになりました。

その後、人間は改めて自分達の存在意義を考え直し、「人間には宇宙を認識することができるという事実や、人間精神に宿る道徳性などが、人間を真の意味で特別な存在にしているものであり、それこそが人間の尊厳の根拠なのだ。」と考えるようになりました。

言葉を変えますと、科学を通じて事物の理解を深めること、本来備わっている人間精神の道徳性を磨くことが、人間としての根本であるということです。

医学はまさにこの科学と道徳の2面を包括し、これを追求する学問であります。

物事をよりよく知る為に努力すること、人間精神の道徳性を磨くこと、この二つは、愛知医科大学に在学中、決して忘れてはならないことであります。

皆さんは、愛知医科大学の発展を支える人材になるだけでなく、社会を支える立派な医療人として、大きな花を咲かせてくれることを信じて、学長告辞とさせていただきます。

祝 辞

理事長 三宅 養 三



医学部、看護学部の新入生の皆さま、この度は晴れて愛知医科大学にご入学になり、心からお喜び申し上げます。多数のご家族の方もこの晴れの席にご臨席され、その喜びもひとしおのものとお察し申し上げます。

愛知医科大学の創立は、今から42年前の1972年です。医師不足が社会問題としてクローズアップされ、私立・国公立医科大学の新設が相次いだ時代でした。現在29の私立医科大学がありますが、当時新設されたいわゆる“新設私立医大”は20校です。しかし愛知医科大学には、これらの新設医科大学とは大きく異なる特徴が一つありました。それは、潤沢な資産を持つ資産家が創った大学ではないということです。初代理事長である太田元次先生のご苦勞は並大抵ではありませんでした。太田理事長は「新時代の要請に応え得る医師を養成し、あわせて地域住民の医療に奉仕する。」、そのような医科大学を創りたいという一心で資金集めに奔走し、ゼロから創り上げたのが本学です。他の私立医科大学とは全く異なります。その情熱とハングリー精神こそが、今日の愛知医科大学の礎となっています。

本日の私の挨拶のキーワードは、ハングリー精神であります。4年前の2010年に理事長を拝命した日以来、私は心に決めていることがあります。それは、初代理事長が持っておられた「ハングリー精神」を、本学学生たちの心に再びよみがえらせることです。

大学は教えるところではなく、学ぶところにあります。「教える」とは教師が知識を与え、それを学生が受動的に頭に詰め込む作業ですが、「学ぶ」とは積極的、能動的に知識を自分のものにするを意味します。自分で学ぶという態度・習慣は医師・看護師として一生求められるもので、学生のうちにその習慣を身につけておかなければなりません。このような習慣を身につけるために必要な精神的資質がハングリー精神であると私は考えています。

大学院入学式

平成26年度愛知医科大学大学院入学式が、平成26年4月4日（金）午前9時20分から大学本館701会議室において挙行されました。

式は、看護学研究科修士課程11名、医学研究科博士課程33名の計44名の新入学生が紹介された後、新入学生を代表して医学研究科の犬飼大輔さんから「学則並びに諸

一般論ですが、本学のような私立医科大学の学生の多くは比較的裕福な家庭に生まれ育ち、不自由のない学生生活を送っているように思います。ご両親もやっと医療人になる大学に入学できたということで、経済的な支援を十分にされることが多いように思います。ところが、欧米の医科大学を見ると、学生は日本の学生と比べ物にならないような質素な暮らしをしています。親が貧乏だからでは全くなく、親が学生に支援をしないことを教育の一環と考えているからです。多くの学生が銀行から借金をして学費を賄っていることは有名な事実です。ハングリー精神の育成です。このハングリー精神は先ほど申しました自分で学ぶ姿勢に通じるのです。

愛知医科大学に入学された皆さまは、是非、いま述べたことを念願においてハングリー精神と使命感を持って勉学やクラブ活動に励んでください。日本では、1人の医師を養成するのに1億円の費用が掛かると言われています。これは、ご両親の多大な支援にとどまらず、多くの国費もこの1億円に含まれます。留年したり国家試験に落ちたりすることは、両親のみならず国民に対する背信行為であると思ってください。

さて、新病院ができました。諸君は実に運が良いと思います。建学以来最大の事業であり、本当に苦勞を重ねて完成した新病院とともに入学できたのです。これからは、先端医療・地域医療の推進だけでなく、教育体制も新病院とともに一変します。素晴らしい臨床教育が受けられるようになるのです。更に、教育の国際化も視野に入れ新しい教育体制が構築されます。医学・医療の基礎的・最先端知識を習得するだけではなく、人間としての教育も重要です。医学は、自然科学と人文科学の要素とを兼ね備えており、医療の対象は人ですから、患者さんとのように接するかは医療人には最も重要な習得課題です。そのため、人間としての幅広さ、教養を身につけるにはクラブ活動も重要でしょう。

愛知医科大学の教育理念に「情緒と品格を備えた医療人の育成」を挙げております。これから大いに発展が期待される愛知医科大学で充実した学生生活を送りましょう。

規則を守り、先生方のご指導に従い本学大学院学生としての自覚を持ち勉学に励むことを誓います。」と宣誓が行われました。

続いて、佐藤学長から告辞が、三宅理事長から祝辞が述べられ式は終了しました。

平成25年度愛知医科大学卒業証書・学位記授与式

医学部・看護学部卒業証書・学位記授与式



平成25年度卒業証書・学位記授与式が、平成26年3月1日（土）午前10時から大学本館たちばなホールにておいて挙行されました。【写真】

式は、君が代斉唱に始まり、石川直久学長から医学部101名、看護学部90名の卒業生一人ひとりに卒業証書・学位記が授与されました。

続いて、石川学長から告辞があり、来賓の三宅養三理事長、浅井富成医学部父兄後援会長、小出龍郎医学部同窓会長及び吉田一平長久手市長からそれぞれ祝辞がありました。この後、在学生を代表して医学部6学年次生の伊佐治泰己さんから送辞が、また、卒業生を代表して看護学部の中村那々子さんから答辞がそれぞれ述べられた後、卒業記念品の贈呈が行われ、午前11時20分ごろ式は終了しました。

告 辞

学 長 石 川 直 久



本日はめでたく卒業式を迎えられ、心からお祝いを申し上げます。ご家族の皆さまには衷心よりお慶び申し上げます。

医学部では101名、看護学部では90名が晴れて卒業されることとなりますが、本学入学に際しても難関を突破され、在学中は一生懸命勉学に励んで試験に合格してこの良き日を迎えることができたということは、将来苦難があっても堂々と立ち向かって無事解決していくことができるであろうと確信しております。

さて、ご承知のとおり世界的にはまだ依然として経済・政治の混迷が続いており、人々の生活には大きな貧富の較差があります。異常気象による天災や人災も頻発しています。人類の長い歴史の中で、世界的規模の問題は数多く報道され、また幾度となく繰り返されてきました。諸君が大学で学んだ多くの教えと問題解決能力そして知識力をいかに発揮することは、今や人類の平和とさまざまな願いの実現に世界が求めていることです。多種多様な市民が安全にかつ健康で市民生活を送っていくために、諸君が今後活躍されることを願っています。

先日、ある女性医師から、WHOの要請で開発途上国に行き、困窮している住民の命を守り、各種疾患の治

療に携わられたお話を伺う機会がありました。本学の卒業生です。開発途上国に行ってみようというだけでも大変だと思いますが、住民と生活をともにしながら疾病予防の原点にある教育問題にも気を配られているなど、ご活躍の状況には感動しました。

科学や文化の著しい発展のおかげで、宇宙の神秘、ミクロの世界を見ることができるようになり、このような新発見や人間の可能性の広大さにもまた、大きく心を揺さぶられます。人生、今は100年と言えなくもない長い人生の中で、我々人類全員が初めて目にすることばかりです。そのことが「人間とは何か。」と言う疑問を呈していますが、未だ正確に答えられないでいます。しかし言えることは、人間は皆幸福に生きる権利があり、喜怒哀楽を享受することができ、それぞれが独自の考え方をもち生きていくことができるということです。そして、人はそれぞれの生きざまを表現します。一方では、他人の生活を妨害することもまた、知らぬ間に起こしてもいます。そこで必要になることは自然法、別名倫理ともいいますが、人に課せられた義務が発生します。お互いの気持ちを尊重し、思いやり、自分の落ち度を認めて謝り、そして助け合う。これが社会のルールです。在学中も最初から人とのコミュニケーションの重要性が教えられてきたわけですが、卒業してから更に医療に従事するに当たって、謙虚に人に接し、弱き病人を治療し労わっていかねばなりません。このことは医療過誤や訴訟を少なくする唯一の方法であり、今まで本学で教えられた経験がそこで遺憾なく発揮されることを切に期待しています。そして今後、生涯愛知医科大学の卒業生であることを誇りにして活発に活動されることを期待します。また、他の人々の模範となってリーダーシップを発揮し、人間社会の中でそれぞれの能力と特徴を思う存分活かしてほしいと思います。

愛知医科大学は、本年5月の新病院開院に向けて医療実施基盤を整備しています。医療機器と設備も最新かつ最高のものです。本学で研修される方は、このような素晴らしい医療機器を使えるという点で幸運と言えるでしょう。一方、開院にはスタッフの気持が非常に大切で、全員が新病院の立ち上がりに心をつなげて取り組んでいく必要があります。更に本学は、新病院開院に先駆けて、「地域社会生活の向上」を目標テーマとして進んでいます。長久手市・尾張旭市・北名古屋市との包括的連携協定の下で、「地域医療の充実を図っていく大学病院」というテーマを設定し、関連する研究・教育・診療を実践していくことが求められています。本学卒業生の皆さんは誇りに持って、そして愛知医科大学を「母校です。」と胸を張って言ってください。

医学・看護学は日進月歩といわれるように、かなりのスピードで進んでいますので、卒業してからが本当の勉強です。そして、初心に戻って自分の描いた大きな目標に向かって突進してください。その道は険しくても、励んだだけの成果は必ず獲得できます。

これをもって学長告辞とします。

祝 辞

理事長 三宅 養三



本日は医学部・看護学部の学生生活を無事修了され、ここに卒業式を迎えられた学生諸君、それにご父兄の皆さまに理事長として心からお祝い申し上げます。

色々な思い出の残る学生生活もこれで終わり、さてこれからは人の命を扱うプロとしての道を歩むスタートラインに立つわけです。現在の日本の医療、医学には多くの問題点が浮上しておりますが、現状の問題を解決するためには諸君の若い力が絶対に必要です。

まずは、戦後の日本の医療・医学が大きな発展を遂げたことをしっかり頭に刻んで下さい。医療面では、国民皆保険制度が導入され、国民が貧富の差なく平等に高度な医療を受けられるようになりました。このように医療を受ける側にとって最も恵まれた国は日本であることは、色々な資料で示されております。

一方、国が教育・研究に割く費用はGDPと比較した場合、日本は世界で最下位に近い状態でありました。更に医科系大学人や勤務医の給料や待遇は先進国の中ではかなり低い状態であったにもかかわらず、日本の医学・医療は大きな発展を遂げ、研究・臨床ともにアメリカにつぐ世界ナンバー2の位置を築き上げました。これらはすべて日本人の優秀さ、勤勉さ、絶え間ない努力、更には日本の大学人・勤務医の価値観が医学・医療の発展に向けられてきた結果であったことを、これからの日本を背負う皆さんに再認識して頂きたい。

医学・医療は多彩な分野を持っており、皆さんの将来は多くの選択肢があります。しかし、自分の将来の方向決めに、これからの数年が極めて重要であります。一番重要なことは、尊敬できる師匠・先輩との巡り合いです。自分の経験をお話しますと、私は卒業した時、大学人として生きていく気持ちなど毛頭ありませんでした。そんな能力もなく、自分の周りの患者さんに頼りにされる良い臨床医になることを夢見て、眼科学教室の門をくぐりました。しかし、すぐに巡り合った先輩や留学先での研究者たちに魅力を感じ、おだてられ励まされているうちに大学での研究・臨床が面白くなり、気が付いたら40年以上も大学で生活してしまいました。今では、この自分の歩んだ道のりに心から満足しており、卒後巡り合ったこれらの人々はよい教育者であり、「私の人生を変えた人」として感謝の気持ちで一杯です。

教育とは知識を教えることではなく、人を育てることだと思います。また別の言い方をしますと、教育とは「恩返し」であると思います。自分が受けた感動を次の世代に伝え、人を育てることを教育というのではないのでしょうか。

私は理事長を拝命して4年が経ち、過去4度この席で卒業生にお祝いの言葉を贈ってきました。しかし、昨年と今年の学生さんには、特に親しみを感じます。それは、この両学年から、医学部学生に対して始めた「大学の未来について語る会」という会があったからです。ホテルでディナーを取りながらこの会を主催しました。理事長

の私と学長、医学部長とが常に同席し、学生の希望や不満を聴き、更に学生に対する期待や我々が大学人として一生を送ってきた楽しさや充実感について、2～3時間熱く語り合いました。一度に15名くらいの学生を招き、最終的にはこの2学年の大部分の学生と語り合うことができました。その会でもっとも強調した点は、人に言われたからではなく自分から学ぶ姿勢を作ってほしいということ、どの学生も自分の能力を過小評価せず、あらゆる分野を視野に入れて夢を持って進んでほしいということでした。更に、基礎医学の重要性も論じました。私は眼科医で臨床が専門ですが、それでも基礎医学の洗礼を若い時代に一度は受けることが非常に大切である経験を何度も語りました。

この「大学の未来を語る会」が、どの程度学生さんに影響を与えたかを評価してみましょう。今年の卒業生を見ていると、この会がよい方向に働いたことが窺えました。

先ほど表彰された在学中の成績がトップであった学長賞の加藤駿介君、2位であった医学部長賞の山本優君はいずれも卒業後、愛知医科大学で臨床研修を致します。このような優秀な学生が卒業後本学に残ってくれるからこそ「大学の未来を語る会」の一つの目的であったからです。更に嬉しいことがありました。この学年の竹内一君と武田陽子さんが、昨年、解剖学の中野隆教授のご指導の下、格式の高い「Surgical & Radiologic Anatomy」に投稿した学術論文が採用され、この雑誌に掲載されました。一度は若い時代に基礎医学の洗礼を受けるとよいという「大学の未来を語る会」で強調したことが、このように実践されているのです。ちなみにこの竹内一君も愛知医科大学で研修を行います。

さて、待望の新病院は今年の5月に開院を迎えます。面積はなんと現病院の2倍の広さとなり、非常に働きやすい病院となります。多くの先端医療機器を備え、手術室も現在の12室から19室と増やし、活気に満ちた愛知医科大学の新しい一歩が始まります。

皆さん、卒業した後、一度は母校に戻り仕事をして、その凄さを堪能してください。

諸君の成長を祈っております。おめでとうございます。

送 辞

在学生 伊佐治泰己さん



厳しい冬の寒さも和らぎ、春の息吹を感じる季節となりました。このよき日に卒業を迎えられた皆さまに在学生一同、心よりお慶び申し上げます。

愛知医科大学に入学されてから今日までの日々はいかがでしたでしょうか。溢れんばかりの希望を抱き迎えた入学式、大会に向けて練習を重ねた部活動、命の尊さについて改めて認識した解剖学実習、医学生・看護学生としての自覚を新たにされた病院実習、数多くの出来事が心に残っていることかと思えます。

そして今まさに皆さまは、医師・看護師としての第一歩を踏み出そうとされています。それは、ご家族の支え、先生方の教え、そして何より皆さまご自身の高い志に導かれたものであると感じます。

新たな世界に対する大きな期待や、あるいは不安もあることでしょう。しかし、皆さまが本学で学び得た知識・精神力を糧とし、医師・看護師を全うしていく、それにより、深い人間理解に基づいた医療を提供されていくであろうことを確信しています。

また、本学でめぐり合い、共に学んだ友人との「絆」を生涯の宝とし、信念を持ち、これからの輝かしい将来へと前進され、新たな道を切り拓いていってください。

我々在学生も、将来医師・看護師としてご活躍される皆さまを手本とし、同じスタートラインに立てるよう、残された学生生活を精進して参ります。

最後になりましたが、皆さまのご健康とご活躍を祈念して、在学生代表の言葉とさせていただきます。

答 辞

卒業生 中村那々子さん



冬の寒さも和らぎ、春の暖かさが訪れる季節となりました。

今日は、私たち卒業生のためにこのような素晴らしい卒業式を挙げて頂き、厚く御礼申し上げます。

また、お忙しい中、ご臨席賜りました学長先生始め諸先生方、ご来賓の皆さま方に、卒業生一同心より御礼申し上げます。

今日、私たち191名は、愛知医科大学を卒業いたします。この晴れの日を迎えることができましたことに、喜びを感じるとともに、これまで私たちを温かく見守り、支えてくださった先生方や家族を始め、多くの方々へ感謝いたします。

私たちは今、愛知医科大学を卒業し社会に羽ばたこうとしています。これからは、人の生命に携わる者としての責任を伴う立場となります。人々を支える立場となることへの緊張感もありますが、愛知医科大学で培った多くのものを糧としてどんな困難にも立ち向かい、乗り越えていこうと思います。これまで以上に学びを深めるとともに、医師・看護職者として、また一人の人間として成長し続けられるよう、志を高く持ち、日々精進していきたいと思えます。

最後になりましたが、学長先生、ご来賓の皆さま、在学生の方々に御礼申し上げるとともに、お世話になりました諸先生方、地域の皆さま、多くの患者さん、医学部父兄後援会、看護学部父母会、大学職員の皆さん、そしてこれまで惜しめない支援をしてくれた両親と家族に、卒業生一同、深く感謝し、皆様のご多幸、ご健康を心よりお祈り申し上げます。

そして、母校愛知医科大学の更なる発展をご祈念申し上げますとともに、本学卒業生として、その名に恥じぬよう、社会への貢献に努めていくことを誓い、卒業生代表の答辞とさせていただきます。

大学院学位記授与式

平成25年度大学院学位記授与式が、平成26年3月1日(土)午前9時20分から大学本館701会議室にて挙行されました。【写真】

式では、看護学研究科修士課程修了者4名、医学研究科博士課程修了者11名一人ひとりに石川学長から学位記が授与されました。

続いて、石川学長から告辞が、三宅理事長から祝辞が述べられ式は終了しました。



アートグラス「心音」寄贈

平成25年度医学部卒業生からの卒業記念品として、7号館（医心館）2階ホールに川上浩子作「アートグラス」が寄贈され、平成26年3月24日（月）に除幕式が行われました。

当日は、三宅養三理事長、石川直久学長、佐賀信介医学部長などの本学役職者を始め、平成25年度卒業生が多数出席しました。

卒業生を代表して雑賀俊行さんから卒業記念品の贈呈があり、「聴診器で聴いた心臓の音が一人ひとり違うように、伝えたい思いも一人ひとり違います。そんな沢山の音（メッセージ）が集まったこの作品に、『心音』と名付けました。医心館へお立ち寄り際には、みんなの音を感じてみて下さい。」とのあいさつがありました。

最後に、石川学長から、「立派な記念品をご寄贈頂き



ありがとうございます。この卒業記念品が末永くこの場所に留まり、卒業生の帰る場所となるようしっかり管理します。」とお礼の言葉が述べられました

いつまでも大切にさせていただきます。ありがとうございました。

平成25年度看護実践研究センター 認定看護師教育課程修了証書授与式挙行

昨年10月に開講した看護実践研究センター認定看護師教育課程の平成25年度修了証書授与式が、平成26年3月26日（水）午前10時から、7号館（医心館）多目的ホール1・2において挙行されました。

式は、開式の辞に続き、冨喜田恵子看護実践研究センター長から、感染管理分野24名、救急看護分野14名の修了生一人ひとりに修了証書が授与されました。

次いで、冨喜田センター長から、「これで終わりではなく、認定看護師としての活動の始まりであり、これからは学ぶ姿勢を持ち、日々精進し頑張ってください。」と式辞があり、続いて、石川直久学長から、「修了してからの本当の学びの始まりなので、本課程で学んだ専門性を活かし、自ら考え実践して頂きたい。」と祝辞がありました。

この後、修了生を代表して、感染管理分野の廣瀬茂雄さんから、「入学当初より、慣れない座学等で大変でし



たが、認定看護師の役割を果たし、地域、医療に深く貢献していきたいと思っております。」との謝辞があり、午前10時50分ごろ式は終了しました。

平成26年度予算大綱

－活力ある未来に向かって－

平成26年度予算が、平成26年3月17日（月）の理事会、評議員会において承認されましたので、お知らせします。

平成26年度予算編成に当たっては、4月の消費税率（8%）引き上げが診療報酬での補てんが限定的で、確実に本学の財政負担の要因となることから、本学が永続的に発展・成長し続けるために、財政基盤の強化・安定の確立を基本に、事業財源を確保することを最重要課題としました。このためには、事業収入の75%を占める病院収入の増収に努めるため、新病院の活性化に繋がる事業を優先するとともに、医療の質を向上させながら医療収支の改善を図る必要もあることから、限られた資金を有効に使いつつ、積極的な増収策と経費の効率的な活用策を盛り込んだ事業を中心に、将来への備えも織り込んで、特殊要素（新病院関係の減価償却費分）を除く、平成25年度と同等条件下（減価償却額24億円）で引き続き黒字の予算を編成しました。

平成26年度予算は、財政基盤の強化・安定の確立を基本とし、事業財源を確保する観点から、5月に開院する新病院の活性化と病院の収入増につながる事業を重点的に計上するほか、長期的な視点に立って医学教育改革、医学研究体制の整備・充実、大学病院の運営の充実など大学の発展を託せるプロジェクトにも意を用い、更に予算編成の原点に立ち返り既存事業のスクラップ&ビルド、経営資源投入の選択と集中を推進します。

新病院の病床数は800床で、A B病棟とほぼ同数ですが、延床面積は86,000㎡と2倍近くとなり、病室は広く、患者アメニティを向上させました。また、その機能性・効率性は、物流動線、患者動線、職員動線を十分に検討した最適なものとなり、先進医療を行う病院として、教育・臨床研究に適した素晴らしいものとなっています。

医療情報システムの導入は、ペーパーレスで効率的な診療体制を図るとともに、診療支援機能の活用、診療情報の可視化や共有、医療の安全性や患者満足度の向上を図るなど、診療の質やサービスの向上、医療安全確保、経営の効率化等を実現します。

1 教育・研究関連事業

本学は、「新時代の要請に応え得る医師を養成し、あわせて地域住民の医療に奉仕すること」を「建学の精神」の主眼点として、「地域」をキーワードに医療への貢献を果たすとともに、地域社会との連携強化と貢献を目指し、「選ばれる医科大学」であり続けるために、常に、より高度の目標に向けて発展を期す考えです。

(1) 医学部・Student Doctor制度の導入

医師を目指す医学生としての自覚、心構え、医療に携わる人間としての責任感や使命感を再認識させることを目的に、本学では、共用試験に合格した新5年生が対象となり、臨床実習に臨む4月に、認証式を行いスタートします。認証式では、認証書とチューデントドクターの章（Student Doctorを表す

ワッペン）を授与します。

(2) 奨学金制度

本学病院で将来職員として活躍することを期待し、奨学金制度を設けました。

- ① 愛知県地域特別枠入学者
- ② 本学卒業生が医師国家試験合格後直ちに本学の医師等として勤務する者
- ③ 本学病院に在籍する看護師で本学大学院看護学研究科に在学し、修了に引き続き本学病院に特定看護師として業務に従事する者

(3) 看護学部・大学院看護学研究科

学部教育では、平成24年度にカリキュラムの一部改正をし、新カリキュラムでの教育を開始していますが、これは、平成24年8月の中央教育審議会答申の提言にある「教員中心の授業科目の編成から学位を与える課程（プログラム）中心の授業科目への転換が必要」として、構築されたものです。

- ① 大学院看護学研究科では、一般の修士論文コース・課題研究論文コースのほかに高度な実践ができる看護師の育成として、専門看護師教育課程（CNS）コースと、平成25年度からは診療の補助にあたる特定行為を実施できる高度実践看護師（看護師特定能力認証）コースの教育を開始しました。
- ② 看護実践研究センターでは、平成25年度に引き続き「救急看護」、「感染管理」の2課程で認定看護師教育課程を開講し、認定看護師の育成を充実させるとともに、卒後研修・研究部門、地域連携・支援部門においても活発な活動を行います。

(4) 教育・研究環境の整備

- ① C D病棟改修に伴うネットワーク整備事業
- ② セキュリティ製品S I N A（ジーナ）の導入
- ③ 2号館（研究棟）3号館（基礎科学棟）施設・設備改修工事（3年次目）
- ④ 核医学実験部門施設・設備の改修工事（2年次目）
- ⑤ 戦略的研究基盤形成支援事業（致命的臓器障害に対する次世代分子標的治療法の開発）
- ⑥ 分子標的薬探索・薬効効果システム整備事業
- ⑦ da Vinciサージカルシステム整備事業
- ⑧ 3 T全身用磁気共鳴断層撮影装置整備事業
- ⑨ 動画ネットワークシステム整備事業
- ⑩ 消化管機能総合診断システム整備事業
- ⑪ トータル心臓運動負荷モニタリングシステム整備事業
- ⑫ 運動療育センタートレーニング機器の更新事業（2年次目）
- ⑬ 教務システムの整備事業（2年次目）
- ⑭ 臨床技術員の適正配置事業

2 医療活動関連事業

新病院開院に当たり、「高度な医療の提供」、「救急医療体制の充実」の2つの柱からなる診療方針を掲げ実践するとともに、大学病院の経営改善を図り医療収入の確保に努めます。

その他、次のような組織整備、人的整備等を行います。

- ・理学療法士、作業療法士の増員
- ・診療放射線技師の増員
- ・臨床検査技師（輸血部）の増員
- ・薬剤師の増員
- ・コンシェルジュの配置
- ・医療保育士（嘱託）
- ・治験管理センター機構改編
- ・スキャンセンターの体制整備
- ・臨床腫瘍センターの改編
- ・若手医師（臨床研修医・専修医）の確保対策
- ・診療活動の活性化対策
- ・看護師の確保対策
- ・医師業務の軽減
- ・医療機器管理業務事業（委託）
- ・先進医療推進事業
- ・新病院個室レンタル事業
- ・病院広報活動事業
- ・新病院移転事業
- ・メディカルクリニック活性化対策
- ① 電子カルテ導入
- ② エレベーター設備更新工事

3 新病院建設関連事業

(1) 新病院開院に向けた業務の効果的推進

新病院の建設はビッグプロジェクトであり、専門的な知識を必要とすることから、大学病院の経営改善、病院全体の運営計画の最適化、給食関連など各分野の専門のコンサルタントを活用しながら進めます。

(2) 新病院建設工事

新病院建設工事、C D病棟改修工事、A B病棟・救命救急センター解体工事、新病院ファシリティサービス事業、公共下水道敷設工事、開院記念行事等を行うこととします。

(3) 新病院建設資金

新病院建設資金は公的機関からの借入金、寄付金、補助金及び自己資金によるところでありますが、平成26年度は建設費の支払額（41億円）うち、公的機関からは約7億円の借入を予定しています。

(4) 新病院建設に伴う寄付金募集

寄付金募集については、平成26年度の目標額を5億円としております。平成24、25年度は、主に教職員、父兄及び同窓生への依頼を行ってまいりましたが、平成26年度は本学関連企業へと軸足を移しての募金活動に入ります。

4 大学運営関連事業

(1) 公共交通機関の導入

現在のスクールバス路線について、本学への乗り入れ実績のある名鉄バスに現行バス路線を継承し、余剰となる本学スクールバスを活用し、新たに南北

方向のバス路線を開設することとします。名鉄バス、スクールバス南北線の導入は、多方面からバスが利用できることとなり、利便性が格段に向上することになります。また、スクールバスの運行に係る経費の大幅削減分は、職員の通勤手当、学生の通学手当にも使います。

(2) 寄附講座の設置

① 造血細胞移植振興寄附講座

アジアの造血幹細胞移植症例登録機構を構築すること。また、造血幹細胞ドナー情報を解析し、ドナーの安全を確保・維持するために必要なシステムを構築し、そのシステムの国際標準化を図ることを目的に設置運営します。

② 地域救急医療学寄附講座

厚生労働省補助事業である地域医療再生計画に基づき、愛知県による地域医療再生計画事業の一環で地域救急医療に関する研究及び救急医療に携わる専門医師等養成のための教育を目的に設置運営します。

③ 臓器移植外科学寄附講座

わが国の慢性腎不全医療を背景に、本学において腎不全患者に対する包括的な医療体制を確立することを目的に設置運営します。

④ 腫瘍免疫寄附講座

がんの薬物療法、外科療法、放射線療法に肩を並べ、腫瘍免疫療法が確立するには多くの解決されなければならない課題が山積していることから、社会が期待する腫瘍免疫療法の確立に貢献することを目的に設置運営します。

⑤ 分子標的医薬探索寄附講座

本学の基礎系研究室と共同研究を行い、DHMEQの新しい抗炎症活性や抗癌活性を開拓するとともに、新規分子標的薬を見出すことを目的に設置運営します。

5 施設設備関連事業

(1) 大学南側隣地用地取得事業

将来的な駐車場不足対策として、本学南側隣接地を取得し、利便性が高く一体可能な駐車場として整備していく計画です。

(2) 都市ガス設備整備工事

都市ガス配管は、腐食の恐れのある鉄管が各所で使用されており、万一、ガス漏れが発生し、供給が停止した場合、復旧には最低1週間以上かかるなどその影響は多大となることから、既設の都市ガス配管を計画的に耐食性の高いガス管に変更する整備していくこととします。

(3) D病棟南北外壁リニューアル工事

D病棟南北面の外装フッ素塗装パネルは、経年劣化（25年間）により目地シールが劣化しており、放置するとパネル内部に水が浸入し、パネル取付金物が錆等により、劣化が進行します。しかし、パネル取付金物を補修するには経費が高いため、シールの全面的な撤去・打ち直し等を行い、パネル内部への雨水侵入防止をはかることで建物の延命化を図ります。

＜資金収支予算＞

(単位：百万円)

収 入 の 部				支 出 の 部			
科 目	平成26年度 予 算 額	平成25年度 予 算 額	増 減	科 目	平成26年度 予 算 額	平成25年度 予 算 額	増 減
学生生徒等納付金収入	5,210	5,111	99	人 件 費 支 出	17,565	17,240	325
手 数 料 収 入	206	208	△2	教 育 研 究 経 費 支 出	18,135	15,611	2,525
寄 付 金 収 入	953	1,066	△113	管 理 経 費 支 出	870	549	320
補 助 金 収 入	2,530	2,017	513	借 入 金 等 利 息 支 出	297	232	66
資 産 運 用 収 入	224	153	71	借 入 金 等 返 済 支 出	4,227	955	3,272
資 産 売 却 収 入	720	978	△258	施 設 関 係 支 出	11,177	23,641	△12,464
事 業 収 入	243	224	20	設 備 関 係 支 出	1,772	469	1,302
医 療 収 入	30,967	28,025	2,941	資 産 運 用 支 出	1,320	1,588	△268
雑 収 入	457	400	57	そ の 他 の 支 出	3,864	3,556	308
借 入 金 等 収 入	773	16,398	△15,625	[予 備 費]	200	200	0
前 受 金 収 入	1,069	1,020	49				
そ の 他 の 収 入	11,793	5,787	6,006				
資金収入調整勘定	△6,556	△6,386	△170	資金支出調整勘定	△6,079	△3,496	△2,583
前年度繰越支払資金	8,430	12,263	△3,833	次年度繰越支払資金	3,671	6,719	△3,049
収入の部合計	57,018	67,264	△10,245	支出の部合計	57,018	67,264	△10,246

(注) ・科目毎に百万円未満を四捨五入表示しているため、合計は必ずしも一致しない。
 ・平成26年度予算額は、5月補正予算額

＜消費収支予算＞

(単位：百万円)

消 費 収 入 の 部				消 費 支 出 の 部			
科 目	平成26年度 予 算 額	平成25年度 予 算 額	増 減	科 目	平成26年度 予 算 額	平成25年度 予 算 額	増 減
学生生徒等納付金	5,210	5,111	99	人 件 費	17,839	17,430	409
手 数 料	206	208	△2	教 育 研 究 経 費	22,325	17,934	4,391
寄 付 金	973	1,086	△113	管 理 経 費	1,042	625	416
補 助 金	2,530	2,017	513	借 入 金 等 利 息	297	232	66
資 産 運 用 収 入	224	153	71	資 産 処 分 差 額	210	82	128
資 産 売 却 差 額	0	0	0	徴収不能引当金繰入額	12	20	△8
事 業 収 入	243	224	20	[予 備 費]	200	200	0
医 療 収 入	30,967	28,025	2,941				
雑 収 入	457	400	57				
帰属収入合計	40,810	37,223	3,586	消費支出の部合計	41,925	36,524	5,402
基本金組入額合計	△5,400	△1,700	△3,700	当年度消費支出超過額	6,516	1,000	5,516
				前年度繰越消費支出超過額	29,650	29,744	△94
消費収入の部合計	35,410	35,523	△114	翌年度繰越消費支出超過額	36,166	30,744	5,421

(注) ・科目毎に百万円未満を四捨五入表示しているため、合計は必ずしも一致しない。
 ・平成26年度予算額は、5月補正予算額



—退官のごあいさつ—

学 長 石 川 直 久

愛知医科大学に着任して約15年、前半の7・8年は、研究に明け暮れていた。そして多くの研究仲間に出会うことができた。常に頭に描いていたことは、若い研究者が、自ら新しい発想でやってくれたらということで、欲しいものがあれば何でも買ってあげたいと思っていた。幸い、研究費に困ったことは少なく、研究目的次第で要求を素直に聞き入れていた。教授は、研究資金を獲得して若い研究者にあてがうことが仕事だとよく言われる。しかし一方では、研究資金が少ない方が、研究できなくて、ものごとを深く考えることができ、このため研究目標や手法を練りに練っておもしろい研究成果が得られるとも思っていたので、わざと研究費を調達できない振りをしたことも思い出される。それでも一人年2報（英文）を出すように奨励していた。

実は、薬理では薬の種類を変えれば何報も可能である。つまり、薬の種類を多くして同じ実験をしても論文にすることが可能であるが、これは薬理の目的ではなく、もしそうであれば、薬学部関係でやれば良いと思っていた。大事なことは、大変難しいのだが、新しい発想で独創的な考え方を世に出すことであると信じて指導していた。そのためには、いろいろな経験をしてもらいたいと語っていた。楽に達成できるものでは決してなく、大変な努力と強大な忍耐を貫いて研究に打ち込んでほしいと思っている。人間関係は、「見ざる、言わざる、聞かざる」という姿勢で、このことに煩わされない時期であった。

後半は、医学部長及び学長として公務に集中することになった。医学部長になって、本学の長所や短所が分かるにつれ、自分の無力に悩んだ。

それには3・4年かかった。多くの方からさまざまなお意見を伺って、かろうじて職務を遂行したにすぎない。そのような多くの意見は、聞くたびに日記につけており、必要に応じて今でも拾い出すことができる。これは現在まで続いており、その結果この人がどんなことを考えて

いるか予想できるようになった。私にはとても及ばない考え方もあった。書くことによって頭にこびりついているので、タイミングに応じて達成しようとしていた。たいへん楽しかった。すばらしかった。お世話になりました。

今後に望みたいことは、新病院ができて本番はこれからである。学長談話室で書いた私の本音は、本学にとって最も大事な課題を探るためであり、それについての教職員の意見を聞くためであった。残念ながら、その趣旨を分かってもらえなかったが、それでも数名の方からはご意見を伺った。貴重に思って、これから披露していきたかった。愛知医科大学を心から思う人が大勢おり、その方々の意見に聞き入って頂きたい。素晴らしい方々がおられる。感動した。人を思いやることが大事であり固執は禁物で、柔軟に対応していただいたい。分裂を防ぐためには、相当な指導力が必要であり、私はその任を全うできなかったと反省している。

時代は大きく変化している。乗り切ってください。感謝、感謝、感謝。



—柳に雪折れなし—

学 長 佐藤 啓二

2014年4月1日より学長に就任をいたしました。新入学生・職員を迎え、新病院の門出も5月9日に迫ってきましたが、希望と不安の入り混じった雰囲気が大学全体を覆っているように思われます。そこで、私は学長として、いまこそ愛知医科大学を発展させるという強い意志を持って、種々の問題解決に取り組んでいきたいと考えています。

医療を取り巻く社会情勢は大きく変貌を遂げてきています。医学生数がかつて経験したことがないようなレベルで増加し続けています。医学部の入学定員は、2007年まで毎年7,600名前後で推移していましたが、2008年から2013年迄の6年間に1,400名以上（累計約6,300名）増加し、2014年度も増えていきますので、数年先には、毎年9,000名以上の医学生が卒業していくこととなります。その一方で、都市部の6都府県（愛知県含む。）においては研修医の募集定員枠が削減され続けていますし、今後は、専門医制度の改革や世界医学教育連盟（WFME）の国際基準への対応に加え、2025年に向けて病床の機能分化が推進され、高度急性期・一般急性期・亜急性期の病床数が削減されていくことへの対応も必要となります。また、医師や看護師の配置といったストラクチャー評価に、プロセス評価・アウトカム評価が加えられていくことにも、対応していくことが求められます。

このような変革の時代にあって、本学がますます発展を遂げる為には、どこの大学にも勝る臨床能力を獲得した学生（医学部生・看護学部生）を社会に送り出すことが必要です。また、研修医については、短期間で各領域の専門技量を修得できるような指導体制も必要です。その為にはプライマリケアセンターでの診療実習（On the job training）が重要であり、更に教育効率を上げる為の方策として、医師の思考過程を追いつつ、しっかりとエビデンスを理解できる教育用電子カルテシステムの構築が重要となります。幸い、新病院においては、これに対する準備も以前より進められてきておりますので、更なる充実を図ることにしたいと思います。更に、医学教育の世界標準化に向けた取り組みでは、研修医教

育の評価から、卒前教育へのフィードバックが不可欠であるとされており、卒前・卒後教育について密接な連携体制を構築しておく必要があります。

特定機能病院については、承認要件が強化され、英文による論文数等の項目も加わりますので、大学として継続性のある研究体制を構築する必要があります。一般大学院生に対しては、講座や診療科の枠を越え、組織横断的に研究指導や研究協力ができる体制の構築が必要と考えています。また、大学の教員が基礎研究を実施する場合、時間負荷をかけず効率よく実行できるような支援体制が不可欠であると考えます。更に、臨床研究や臨床治験についてもURA（University Research Administrator）の設置・活用を推進していかねばなりません。そして、診療については、より高度な診療を効率よく展開していく為の新たなシステムの構築が必要となります。

地域医療への支援については、マンパワー不足でなかなか実現しておりませんが、ヒューマンブリッジ（HumanBridge）という電子カルテシステムを利用し、まずは開業医の先生方や地域病院と医療情報を共有しつつ、地域で患者さんを守る体制を作る必要があります。また、本学卒業生が優れた環境で研修を受けられたり、専門医取得後のキャリアアップにつながる職場となるような、提携病院を構築していく必要があります。

「柳に雪折れなし」という言葉どおり、本学がしなやかで、かつ活力ある大学として発展し続けていけるよう、皆様のご協力とご支援を頂戴しながら、頑張りたいと思っておりますので、どうか宜しくお願いいたします。



—道は拓ける—

医学部長 岡田 尚志郎

この度、医学部長を拝命致しました。今日の大学医学部を取り巻く厳しい状況の中で、医学部の責任者としてその責任を果たすことの重大さをひしひしと感じる毎日です。

愛知医科大学は、昭和47年開学当時からの数年間、受験者数が約300名程度であったものが、40年余経った現在では約2,000名にまで増えており、名実共に重要な私立医科大学となっています。しかし、「2018年問題」と言われる18歳人口の減少や「2023年問題」と言われる医学教育のグローバルスタンダード化といった、早急に対応していくべき問題が山積する中で、本学が更なる発展を遂げるためには、「旧来のままの医学部のあり方では難しい。」ということに異論のある方はおられないのではないかと思います。そこで、この場をお借りして、医学部運営、教育、研究の今後のあるべき方向性について、私見を述べさせていただきます。

医学部運営は、大学の明確なビジョンのもとに、医学部長の役割に応じた責任を果たしていくことが重要で、これが大学運営の柱の一つになると考えます。

具体的には、とりわけ学長と医学部長はしっかりとビジョンを共有し、それぞれの役割と責任を明確にし、意思の疎通を図り、協働して考え、同じ方向に行動する必要があります。その際には、教授会のメンバーのご意見を踏まえ、きちんと反映されるように大学執行部の一員として力を尽くします。更に、できるだけ多くの場面で、教授のメンバーの他に、各層の構成メンバーが参加し、意見を吸い上げることができるような組織体制の整備が必要と考えます。

教育は、世界医学教育連盟（WFME）の提唱する基準を踏襲し、可及的速やかにカリキュラムを改訂すること、ファカルティディベロップメントを充実させること、そしてこれらを具体化する医学教育センターを始めとする教育組織の充実が必須の要件です。特に、高齢化社会に対応できる総合的な診療能力を持った医療人の養成が求められ、グローバルな医学教育認証に対応した診療参加型臨床実習の充実が必須要件となっている現況では、

本学における医学教育カリキュラムの抜本的な改革は避けて通ることができません。

このような医学部における教育の充実には、当然ながら、教職員、同窓会、保護者が一丸となって取り組むこと、特に講座間、教職員間においては、お互いの協働が不可欠であり、またそのような雰囲気こそが学生の品性の源ともなるでしょう。このような基盤の上に立って、21世紀を担う学生には、「自分で考え、自分で決断し、自分の責任において実行する。」という自立した生き方を身につけてもらいたいと願っています。

研究は、学内の基礎研究者及び臨床研究者の積極的な交流とチーム作りのために、それぞれの研究者が持っている研究技術、研究材料、人材を有機的に結びつける仕組み作りが不可欠です。具体的には、情報のバンク化やリサーチミーティング開催によって、領域や組織、構成員を超えた風通しの良い情報伝達ができるようにしたいと思います。これらをもとに、オール愛知医大として一つでも多くの研究成果を出すことができると期待されます。

最後に、本学が時代の要請に的確に応え、社会から選ばれ求められる存在であり続けるためには、「絶えず変革をつづけること」が重要です。そうすれば、東海地方随一の品格を備えた私立医科大学への『道は拓ける』と考えます。

皆さまのご支援を賜りますようお願い申し上げます。



—社会変化に対応した 看護職員の育成を目指して—

看護学部長 衣斐 達

平成26年4月から学部創設以来、高橋照子氏、土井まつ子教授、八島妙子教授に次いで4人目となる看護学部長をお引き受けすることとなりました。

本学部は、平成12年度に開設され、今年度で15年目を迎えます。卒業生は平成25年度に90名を送り出し、1,148名となりました。その間にカリキュラムの改正を定期的に行い、平成24年には保健師課程の選択制を導入しました。本大学院は、平成15年度に修士論文コース、専門看護師（CNS）コースの感染症看護が平成18年度、急性・重症患者看護が平成20年度、高度実践看護師コースのクリティカルケア領域（周術期）が平成25年度に開設され、これまでに65名が修了しました。また、看護実践研究センターが平成21年度に開設され、172名が修了しております。これらの業績は前任3学部長の確固たる信念と並々ならぬ努力があつたことと深く感謝しております。

わが国では、低出生率、未婚・晩婚化、長寿化による世帯の小規模化、経済の低成長化、雇用形態の多様化、価値観・ライフスタイルの多様化、社会のグローバル化、国家財政の深刻化、疾病構造の変化などにより、医療環境も多様化しています。こういった医療環境の変化に対し、国民が求めているのは安心して信頼できる質の高い医療サービスの提供です。そのため、看護の需要が年々増大し、高度な看護技術と高い倫理性を備えた安全なケアの提供できる看護職を養成するための看護学教育への期待も大きく高まっています。

本学部では、豊かな人間性を涵養し、看護の対象となる人々との信頼関係を築き、ヒューマンケアを提供できる看護専門職を育成するとともに、専門職者として創造的・発展的に実践能力を身に付けることを教育理念としています。教育のキーワードは、豊かな人間性(Humanity)、国際性(Internationality)、地域社会への貢献(Community)のH.I.Cです。その実現に向けて、卒業時に看護師として次のような能力が求められます。

1 良識ある社会人として、思いやりのある豊かな人間性、高い倫理性を備え、人間の尊厳と権利を擁護する

立場に立つこと。

- 2 医療環境の変化に対応できる高度な専門的知識・技術を有した看護実践能力を備えること。
- 3 看護専門職者としての自律性を育み、チーム医療の中で諸専門領域の人々との協働者及び調整者としての能力を養うこと。
- 4 多様な背景を持つ人々と信頼関係を築くために、国際性と看護専門職としてのケアリング能力・ヘルスプロモーション能力を備え、地域社会の保健医療に貢献すること。
- 5 生涯学習に取り組み、看護実践者・教育者・研究者として看護学の発展に貢献すること。

上記の目標を達成するために、医学部・大学病院との連携を図り、教育環境の充実に努めます。

本年度は、新学長、新医学部長が就任されるとともに5月には新病院が開院し、愛知医科大学が新たな飛躍の時代を迎えます。看護学部においても学部長、教務学生部長、看護実践研究センター長など役職者が改選となり、新体制による学部運営が始まりました。今後とも、社会の要請に対応し、学生たちが才能を十分伸ばし、看護専門職者として学部を巣立っていけるよう、教職員一同尽力してまいりますので、ご支援宜しくお願い申し上げます。



—成長し続ける看護職員の育成—

看護学部教務学生部長 八島 妙子

看護学部は、平成15年度に第1期生を送り出して以来、今年で卒業生が1,148名となり、愛知医科大学病院を始め、全国各地の保健医療福祉機関で活躍しております。初期の卒業生はリーダー的役割を果たすようになり、更に、大学院進学や専門性を高めるなど広く活躍しています。

学部開設以来、より質の高い看護職者になりうるための基盤となる教育を目指してカリキュラムの改正、教員の教育力の向上を図ってきました。卒業後の学ぶ場として大学院看護学研究科修士課程を設置し、看護実践研究センターに認定教育課程を設置することにより、看護職としての更なる成長を支援する体制も整ってきました。

本学部が充実と発展を続け、開設15年を迎えた年に教務学生部長を拝命しました。教務学生部長として、現在ある課題を明確にし、教職員と共有しながら教育の充実と学生生活の支援に取り組んでいきたいと思っております。

看護実践力を向上させるために改正した看護基礎教育カリキュラムを導入して次年度で4年になりますので、4年間の教育を検証することで、更に改善し充実を図る必要があります。このカリキュラムは、保健師助産師看護師法の改正により保健師教育の修業期間が6か月以上から1年以上へと変更された時に、看護師課程の教科内容も充実を図ったものです。専門基礎科目、看護学専門科目は可能な限り連動して配置することで体系化し、教養教育科目を学びに応じて高学年次まで配置しています。また、看護実践能力を育成するための科目を充実しました。保健師教育は今年度から、30名の選抜した学生に対して本格的に保健師に特化した科目がプラスされて学び始めています。

社会保障・税一体改革においては、消費税率を引き上げ、その財源を活用して、医療サービスの機能強化と同時に重点化・効率化に取り組み、2025（平成37）年に向けて、医療提供体制の再構築、地域包括ケアシステムの構築を図ることとされています。その具体的な内容には、急性期病床の位置付けを明確化し、医療資源の集中投入

による機能強化を図るなど医療機関の機能分化・強化、一般病床における長期入院の適正化を推進、在宅医療の充実があります。少子高齢化が進展するわが国の多様な医療ニーズに応えられる看護基礎教育となる教育内容とするために、常に社会に目を向けた対応と、同時に学ぶ学生の背景にも考慮した教育内容や方法が必要です。

学生には自己を見つめ自らの課題を克服し、主体的に学習し、成長していった欲しいと思っています。看護実践能力の基礎を学生一人ひとりが獲得し、それが実感できるような関わりが大切であり、ダイナミックな教員組織であることが求められると考えます。学生の教育環境として、医学部との教育連携、大学病院を始め実習教育施設との連携など教育環境は年々充実してきております。

今後とも、社会の要請に対応しつつ、学生たちが伸びる可能性を持った看護専門職者として学部を巣立っていただけるよう、教務学生部長として微力ながら尽力してまいります。関係各位のご指導、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

主な役職者の改選

○ 大 学

【医学情報センター長】



小林 章雄

(衛生学講座・教授)

知の拠点インフラとして、愛知医科大学が新しい価値の創造に向けて更に活性化されるよう、皆さまの多様なニーズに応じてまいります。また、医療健康情報の窓口として、患者さん、市民、地域コミュニティとの交流に貢献します。

(再任、任期：H26. 4. 1～H28. 3. 31)

上げます。

今年度は、いよいよ電子カルテの導入に向け、本格的な作業に入ります。これにより、メディカルクリニックと大学病院の間で患者情報のやりとりが可能になり、大学病院と同じ環境で診療もできるようになります。愛知医科大学の診療・研究部門の一つとして、メディカルクリニックの更なる活性化を目指し、これからも努力を重ねて参る所存です。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

(再任、任期：H26. 4. 1～H28. 3. 31)

【加齢医科学研究所長】



吉田 眞理

(加齢医科学研究所・教授)

加齢医科学研究所所長を拝命いたしました。本研究所は、昨年設立30周年を迎え、市民公開講座及び記念講演会を開催しました。神経病理学を中核に据えて、更に本研究所の発展を目指したいと思います。

(再任、任期：H26. 4. 1～H28. 3. 31)

【学際的痛みセンター長】



牛田 享宏

(学際的痛みセンター・教授)

病院や自治体、その他の機関との連携により、スポーツをする市民から患者さんまで広くニーズにあった新しいコンセプトでセンターの活性化を目指したいと思います。

(再任、任期：H26. 4. 1～H28. 3. 31)

○ 医学部

【学 生 部 長】



道勇 学

(内科学講座(神経内科)・教授)

引き続き2年間、学生部長を務めさせて頂きます。学生諸君が、“良き医師”，そして“善き医師”となるべく、覚悟と誇りある向上心と豊かな人間性の涵養に尽力する所存です。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

(再任、任期：H26. 4. 1～H28. 3. 31)

【総合医学研究機構長】



横地 高志

(感染・免疫学講座・教授)

総合医学研究機構の研究環境は、質量ともかなり整備されてきています。更に研究に役立つ人材、技術、設備・装置を充実させ、研究者に使いやすく、最先端な医学研究が可能となるよう後押ししたいと思います。

(再任、任期：H26. 4. 1～H27. 3. 31)

【メディカルクリニック長】



馬場 研二

(メディカルクリニック・教授(特任))

引き続き、メディカルクリニック長を拝命致しました。1期目の2年間は、大学からも多くのお力を賜り、昨年度は過去10年間でほぼ最高額に相当する診療実績を得ることができました。厚く御礼申

【看護実践研究センター長】



臼井 千津

(成人看護学・災害看護学・教授)

看護実践研究センターは、認定看護師教育部門(感染管理、救急看護)、卒後研修・研究部門、地域連携・支援部門の3部門から成り、看護職の実践的な発展を支援して行きます。ご協力をお願い致します。

(新任、任期：H26. 4. 1～H28. 3. 31)

名誉教授称号授与式挙行

平成26年3月31日付をもって任期満了退職された石川直久学長及び定年退職された二村真秀教授（生殖・周産期母子医療センター）、佐藤美佐子教授（急性・重症患者看護学）に愛知医科大学名誉教授の称号が授与され、平成26年4月1日（火）午後0時10分から大学本館役員会議室において授与式が行われました。

授与式には、三宅養三理事長を始め佐藤啓二学長、岡田尚志郎副学長・医学部長、島田孝一法人本部長、羽根田雅巳事務局長が出席し、三宅理事長から称号記が授与されました。

記念撮影【写真】の後、昼食を交えた懇親会が開かれ、和やかな雰囲気の中、午後1時ごろ授与式は終了しました。



出席者による記念撮影

学長招聘特別講演会開催 別役智子先生、中川弘子先生

医学や看護学の枠組みを越えて、幅広い分野で活躍しておられる著名人の方々を講師としてお招きしております「学長招聘特別講演会」が平成26年2月に2回開催されました。

詳細は以下のとおりです。

平成26年2月12日（水）午後5時から、大学本館201講義室において、慶應義塾大学医学部内科学教室（呼吸器）教授の別役智子先生【写真】を講師にお招きし、「医師として仕事をし続けるために」と題した講演会が男女共同参画プロジェクト委員会主催で開催されました。

講演では、女性医師としてのキャリアアップを始め、育児や研究などについて、ご自身の体験を通してお話を頂きました。

次に、平成26年2月26日（水）午後6時から、大学本館303講義室において、本学卒業生であり、現在名古屋大学大学院医学系研究科（予防医学）博士課程在中の中川弘子先生【写真】を講師にお招きし、「少しの勇気で人生は変えられる～途上国での国際協力活動を経験して～」と題した講演会が開かれました。

講演では、国際保健分野で働こうと決意した経緯や以前勤務されていた国際NGOでの体験について、多くの写真を交えてお話を頂きました。



別役先生



中川先生

各講演会には、多くの関連分野の教職員や学生の参加があり、参加者は熱心に聞き入っていました。

愛知医科大学スクールバス 大学・大学病院～藤が丘間 42年間の運行に幕

平成26年3月31日付をもって、愛知医科大学・同病院と藤が丘駅間で運行していたスクールバスが4月1日からの名鉄バスの移管に伴い、廃止となりました。

スクールバスは、本学が開学した昭和47年4月に職員用定期バスとして運行し、同年9月から現在と同様に、学生用スクールバスとして運行を開始しました。

平成18年には、スクールバスのデザインを変更し、教職員及び学生のみならず、来院者の方々など多くの方々にご利用頂いておりましたが、愛知医科大学・同病院と藤が丘駅間での42年間の運行に幕を閉じることとなりました。



3月31日の最終便（病院玄関前）

バス新規路線運行開始 ～名鉄バス愛知医科大学病院線・スクールバス南北路線～

平成26年度から、本学の長年の悲願であった公共交通機関が導入され、名鉄バスが名鉄バスセンターと地下鉄東山線藤が丘駅から大学病院まで運行することで、交通アクセスが更に便利になりました。また、本学のスクールバスも新たに名鉄瀬戸線尾張旭駅と東部丘陵線（リニモ）長久手古戦場駅から大学病院までの運行を開始しました。

4月1日（火）には、スクールバス及び名鉄バスの新規路線開業を記念して、「スクールバス南北路線発車式」及び「名鉄バス愛知医科大学病院線発車式」がそれぞれ執り行われました。

スクールバス南北路線

8時20分から、愛知医科大学新病院玄関前において、「スクールバス南北路線発車式」が執り行われました。

式典の開催に当たり、三宅養三理事長からごあいさつがありました。

発車式では、開業を記念して三宅理事長、佐藤啓二学長、島田孝一法人本部長によるテープカットが行われました。

その後、三宅理事長から乗務員へ花束が贈呈され、池谷総務部長の発車合図により、記念便が発車しました。

名鉄バス愛知医科大学病院線

続いて、8時30分からは、同会場において、名鉄バス株式会社主催で「愛知医科大学病院線発車式」が執り行われました。

式典の開催に当たり、小池潤代表取締役社長からごあいさつがあり、続いて、三宅理事長の来賓あいさつがありました。

発車式では、開業を記念して、小池社長、三宅理事長、島田法人本部長によるテープカットが行われました。

その後、伊藤正雄常務取締役から乗務員へ花束が贈呈され、名鉄バス名古屋営業所長の発車合図により、記念便が発車しました。



「スクールバス南北路線」開業記念テープカット
(左から佐藤学長、三宅理事長、島田法人本部長)



「名鉄バス愛知医科大学病院線」開業記念テープカット
(左から島田法人本部長、三宅理事長、小池社長)

予算全学説明会の開催

平成26年4月9日（水）18時から大学本館たちばなホールにおいて、平成26年度予算についての全学説明会が開催されました。

まず、三宅養三理事長から、平成23年7月に新病院建設が開始されて以降、順調に工事が進み、期待通りの新病院が完成し、来る5月9日に開院を迎える運びとなったことについて、職員のご努力とご協力の賜物であるとの感謝とともに失敗の許されない引越しを乗り越え、無事に開院を迎えるよう引き続き頑張りを期待する旨のあいさつがありました。また、資金運用問題についての解消宣言も出されました。

特に、資金運用問題については、当初損失額及び各年

度の対応状況、更に現在の債券状況と今後の見通し等について詳細な説明があり、問題解消とする金額的裏付けが示されました。

次に、島田孝一法人本部長から、「平成26年度予算概要」のほか、本学の「財政状況」、「資金運用報告」などについて、説明が行われました。

また、「新病院の完成までの歩み」として、解体工事前の現場の様子から始まる工事の進捗状況を取めた写真を用いて、着手から完成に至るまでの経緯報告が行われました。

なお、参加者は約100名でした。

平成26年度職員新任式挙行

平成26年4月1日（火）C病棟201講義室において、平成26年度職員新任式が行われました。

式では、三宅養三理事長から新任職員に対し、「新病院開院までの1か月間に現病院をよく見ておいてください。現病院と新病院を比較して頂くと、いかに新病院が工夫をして良い病院になったかが分かると思います。新病院は、『元気ホスピタル』という名前が付いています。患者さんに元気になって頂くことで、そこで働く私たち職員も元気になるということです。効率良く働きやすく、その効果がきちっと出て患者さんの為にしっかりと役に立つ病院になっています。全てが新しくなって、本当にいい時に職員になられたと思います。私が、皆さんに期待する事はとても大きいです。どうか本当にすばらしい職場に勤めたというプライドと、やる気を全面に出して頑張ってくださいと思います。」とあいさつがありました。



あいさつする三宅理事長

なお、今年度の新規職員は218名で、内訳は教員56名、事務13名、技術1名、医療15名、看護133名です。

平成26年度新規採用職員研修実施

平成26年度新規採用職員161名を対象に、平成26年4月2日（水）、3日（木）の2日間にわたり、新規採用職員研修を実施しました。

学生から社会人への意識転換に触れ、「学生と社会人の違い」や、「なぜ、マナーが求められるのか？」について、自ら考え自発的な社会人意識、マナー意識を醸成する研修を行いました。

本学の概要、ビジョン等を説明する講義では、島田孝一法人本部長から、本学の財政状況の解説と、先人たちの言葉を紹介して、努力の大切さを伝え、受講者からは、「職員一人ひとりが財源について意識していく必要があると思った。」「自分達への期待を感じられたので、期待に応えることができるよう一生懸命頑張りたい。」と感想がありました。

続いて、平成26年度新規採用事務職員12名を対象に、平成26年4月4日（金）、4月7日（月）、8日（火）の3日間にわたり、事務職員研修を実施しました。

事務組織の管理職等22名から、各部門の役割について説明を受け、事務組織の役割理解と、事務職員に必須となる文書事務、問題解決思考等の学習を行いました。

チームビルディングの手法を取り入れたプログラムで



は、タワー作りのワークから、チームで目標を掲げて成果を上げていく意識の作りを行った他、1年目の行動目標を自分たちで決め、最終日に発表を行うなど、最高の同期チームを目指したグループワーク行いました。

配属後の成長と活躍により、組織への貢献が期待されます。

講義概要

- 4月2日（水）職場の常識、ビジネスマナー
- 4月3日（木）大学の概要とビジョン、新規採用職員に期待すること等

講義概要

- グループワーク（チームビルディング、半年間の行動目標）
- 事務組織各部門の役割、機能及び目標
- 文書事務、問題解決思考、電話対応、パソコンの取扱、目標管理制度等

愛知長久手ロータリークラブ 新病院へ車椅子の寄贈

愛知長久手ロータリークラブから、新病院の開院に合わせて車椅子15台の寄贈があり、平成26年3月25日（火）新病院玄関前において、愛知長久手ロータリークラブ会員の皆さんと看護部スタッフを始め、本学関係者列席のもと、山田文明会長から小池三奈美看護部長に目録が贈呈されました。

今回の寄贈は、旧病院において、約20台の車椅子が外来患者用として利用されていましたが、老朽化が進んでいたため、新病院開院に合わせて、地域のロータリークラブとして何か貢献したいとの申し出があり、実現したものです。

寄贈された車椅子は新型のアルミ製で、新病院のエントランスに置き、車椅子を必要とする外来患者の利用に供することとしています。



贈呈式での記念撮影

医学部腫瘍免疫寄附講座 大型研究費の更新

平成24年から本学医学部に設置された上田龍三教授の医学部腫瘍免疫寄附講座では、最近、がんや自己免疫疾患で注目されている制御性T（Treg）細胞に着目し、より有効な免疫療法の開発を目指した研究を精力的に進めています。

平成24年7月には、本学が統括本部となり全国ネットワークで推進する開発研究（がん局所からTreg細胞を取り除くがん免疫療法）が厚生労働科学研究費補助金に採択され、極めて大型の科学研究費を取得しています。当該研究は、平成24年度から平成26年度までの3年計画で、これまでの2年間で約4億8千万円の科学研究費を取得しています。

この度、厚生労働省の「難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業（がん関係分野）」において、3年目の平成26年度に向けての中間評価が行われました。当該研究は、審査対象課題の中において最も高い評価を受け、平成26年度もこれまでの2年間よりも更に高額の科学研究費を取得することとなりました。これは、当該研究が、基礎医学研究、臨床医学研究の領域を超えて行われるものであり、難治性の固形がんに対する新しい有効



研究会議で講演する上田教授（写真中央）

な治療法の確立が期待されての評価であります。

現在、安倍政権の日本版NIH構想により研究費の重点配分が行われ、多くの科学研究費が削減されています。このような状況で、上田教授の研究課題が高評価を受け、大型科学研究費が更新されたということは、国の当該研究に賭ける意気込みを感じるとともに、本学にとっても極めて名誉なことでもあります。

市民大学公開講演会開催

平成26年2月1日（土）午後1時30分から、名古屋市中区役所ホールにおいて、本学共催の名古屋市生涯学習推進センターで「市民大学公開講演会」が開催されました。

当日は、名古屋市を始めとする多くの一般市民の方々にご参加を頂き、「愛知医科大学における最先端研究・医療」をテーマに、2部構成で行われました。

講演会は、石川直久学長による開催のあいさつに始まり、第1部講演では、内科学講座（循環器内科）の天野哲也教授から「心筋梗塞で倒れる前に聞いておくという話」と題して、心筋梗塞の予防対策などについて、具体的な症例や数値を示しながらお話し頂きました。続いて、第2部講演では、外科学講座（乳腺・内分泌外科）の今井常夫教授から「甲状腺腫治療の最先端」と題して、本院における甲状腺腫の治療法等についてお話し頂き、参加者の皆さんは熱心に聞き入っていました。



天野教授



今井教授

新入学生ガイダンス実施 ～大学生としての第一歩～

平成26年度入学生を対象としたガイダンスが、医学部は4月10日（木）・11日（金）、看護学部は4月4日（金）から11日（金）に実施されました。各新入生からは、入学の喜びの表情が溢れていましたが、ガイダンスが進むにつれて、これから始まる大学生活への真剣なまなざしが見受けられました。

◆ 医学部ガイダンス概要

日	時 間	内 容
四月十日 (木)	10:00	医学部のカリキュラムについて
	11:30	授業, 試験等の教務関係について
	13:15	・学生生活支援について ・災害(地震, 台風等)について
	14:00	留学制度に関する説明会
	14:20	実習衣採寸・注文 実習用ズボン採寸・注文 教科書販売
15:00	自動車学校入校説明会(任意)	
四月十一日 (金)	10:00	防犯講習会 ・防犯講話 ・防犯実技 ・薬物講和
	11:30	・ハラスメント防止に関する説明会 ・学生相談室の紹介
	13:00	大学施設紹介 ・愛知医大サービス株式会社
	13:30	大学施設紹介 ・情報処理センター
	14:00	大学施設紹介 ・医学情報センター(図書館) ・運動療育センター
	14:40	奨学制度に関する説明会(任意)

◆ 看護学部ガイダンス概要

日	時 間	内 容
四月四日 (金)	11:00	看護学部長あいさつ
	11:10	教員紹介
	11:40	集合写真撮影
	11:45	通学定期券購入手続き等
四月七日 (月)	9:00	医科大学生として習得しておくべき心肺 蘇生法の講習会
	13:00	学修オリエンテーションⅠ (学則, 履修規程, 学習方法等)
	14:30	学修オリエンテーションⅡ(1部)
	15:50	学修オリエンテーションⅡ(2部)
四月八日 (火)	9:00	学業生活について(1部)
	10:00	学業生活について(2部)
	10:40	傷害・賠償保険等の説明
	11:10	大学施設紹介 ・運動療育センター
	11:30	施設見学 実習衣の採寸 アドバイザーとの話し合い
	14:00	保健衛生・感染症対策
	14:30	新入生研修ガイダンス
	15:00	アンケート記入
	15:30	教科書販売
四月九日 (水)	9:00	施設利用講習会 ・情報処理センター
四月十一日 (金)	10:00	防犯講習会 ・防犯講話 ・防犯実技 ・薬物講和
	11:30	・ハラスメント防止に関する説明会 ・学生相談室の紹介

Student Doctor 認証式

医学部では、平成26年度から、臨床実習を行う5学年次生に対し、医療人としての自覚と責任感を持って実習に取り組む姿勢や医師としてのプロフェッショナルリズムの育成を目的に、「Student Doctor」の称号を授与することとなりました。

本制度は、全国医学部長病院長会議が提唱するもので、共用試験CBT・OSCEに合格し、後期課程に進級した医学生に対して「Student Doctor」の称号を授与し、臨床実習で患者診療に参加するに足る知識・技能・態度を持っていることを保証するものです。また、これに伴い実習衣も新調されました。

臨床実習を始めるに当たり、平成26年4月2日（水）午前11時から、大学本館たちばなホールにおいて「平成26年度Student Doctor認証式」【写真】が挙行されました。

認証式では、岡田尚志郎医学部長から「Student Doctor制度」の趣旨と心構えなどについて話があり、新しい実習衣を着用した103名の5学年次生一人ひとりに対し、岡田医学部長からStudent Doctor証書、細川好孝教務部長からStudent Doctor章（ワッペン）が授与されました。

次いで、佐藤啓二学長、野浪敏明病院長、小池三奈美



看護部長からもあいさつがあり、学生代表の小林千夏さんから「Student Doctorの自覚と責任を持ち、患者さんを始め、医療スタッフの方々からも、一人の医療者として認められるよう、より一層、努力することを誓います。」と宣誓が行われました。

認証式終了後は、新病院オアシスホールで記念写真を撮影し、7号館（医心館）で臨床教員及び看護部職員との懇親会及び臨床実習に関するガイダンスがありました。

篤志献体者に 文部科学大臣から感謝状贈呈

本学の解剖学教育のために献体頂いた次の方々に対し、文部科学大臣から感謝状が贈呈されました。
なお、感謝状の贈呈は、献体者のご遺族が受領を希望された方です。

浅見美代子 殿	安藤 昭二 殿	石井 徹郎 殿	石濱 重道 殿	伊藤 幸代 殿
稲垣 周一 殿	梅田 可祝 殿	大澤 三郎 殿	岡本みよ子 殿	上出 妙子 殿
河合 花井 殿	小島 祐松 殿	小寺よし子 殿	佐古 良一 殿	佐藤 裕子 殿
鈴木百合子 殿	富田美枝子 殿	中西 俊孝 殿	中西 豊子 殿	永沼 一 殿
中根 康夫 殿	樋口 すま 殿	菱田 隆義 殿	宮崎 二郎 殿	森田 保夫 殿
山下 くに 殿	吉田しよう 殿			

（以上 五十音順）

平成25年度実験動物慰霊祭挙行

平成25年度医学部実験動物慰霊祭が、平成26年3月12日（水）午後1時30分から実験動物供養塔前において厳かに執り行われ、医学の教育・研究の発展のための礎となった諸動物の冥福を祈りました。

慰霊祭では、始めに本学の医学研究のために貢献した動物の諸霊に対し参加者全員で黙祷が捧げられました。引き続いて、佐賀信介医学部長から、瞑目した諸動物に対して、その尊い献身に感謝するとともに慰霊の辞として、医学研究の発展のため尊い犠牲となった動物たちの霊に哀悼の意を表し、今後とも動物愛護の精神に基づき、更に実験動物の愛護に努めることを誓いました。

その後、横地高志総合医学研究機構長、奥村正直動物実験部門長に続いて、日頃、動物実験や飼育に携わっている教職員や学生一人ひとりから白いカーネーションの花が献花台に捧げられ、諸動物の冥福を祈りました。



哀悼の辞を述べる佐賀信介医学部長

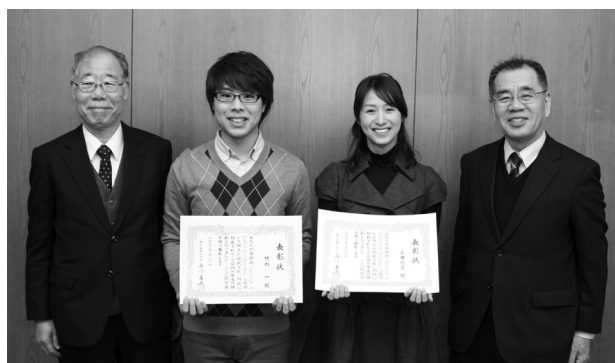
学生表彰

医学部6学年次生(当時)の竹内一さんと、武田陽子さんが、ドイツ学会誌「Surgical & Radiologic Anatomy」に投稿した学術論文が採択され、同誌に掲載されました。

これは、2学年次の解剖実習において見出した極めて稀な血管変異例について、発生学的及び臨床医学的な考察を加えて英文論文にまとめたもので、学術的に優れた内容であることが国際的に評価されたものです。

他の学生の模範となるこの活動を評価し、平成26年2月26日(水)学長室において、石川直久学長から表彰状と記念品が贈呈されました。

今後も、各方面で表彰される学生が続くことを期待します。



記念撮影
(中央左：竹内さん，中央右：武田さん)

医学部学生 黒須春香さん、加藤智大さん 第119回日本解剖学会全国学術集会『献体学術賞』を受賞

平成26年3月27日(木)から29日(土)に自治医科大学で行われた第119回日本解剖学会全国学術集会において、本学医学部4学年次生の黒須春香さん、加藤智大さんが『献体学術賞』を受賞されました。

この賞は、解剖学分野において特に優れた発表5題に対して授与されるものであり、学生が受賞するのは異例のことです。また、平成24年度にも本学学生が同賞を受賞しています。

受賞された黒須さんからは、「解剖学は、臨床を学ぶ基盤となる学問として、とても重要であると考えています。2学年次の解剖実習を終え、更に解剖学の知識を深めたいと思い、中野先生にお話をしたところ、研究を行うことになりました。切片の作成や染色など、初めてのことでばかりで苦労したことも多々ありましたが、解剖学講座の先生方の丁寧なご指導とご協力により、無事に学会での発表を終えることができました。そればかりか、献体学術賞まで頂き、大変光栄に思います。今後も、この研究で得た知識を活かしていきたいと思っています。」と感想がありました。

また、同学会では、本学医学部2～4学年次生(現3～5学年次生)が4題の学会発表を行いました。多数の演題を学生が発表したのは本学だけであり、医学生の研究に対する高い意識が伺えました。

発表した学生からは、「解剖実習が始まってからの半年間、ほぼ毎日、ご遺体と向き合いました。発表当日は、お褒めの言葉も厳しい言葉も頂きました。時間と労力を費やし、辛いこともありましたが、この半年間は私の財産となりました。」(福井隆彦さん)、「討論の時間には多くの質問やご指導を賜りました。ある臨床の先生には手術の際の注意点と、同じような症例は手術前に見ることが稀にあるが、発生学的視点で考えるのは逆に新鮮だと評価して頂きました。自ら調べて得た知識を質疑応答できちんと答えることができたのは、苦労が報われたと感じる瞬間でした。」(都築侑介さん)、「当日の臨場感、1対1でのディスカッション、研究に対する責任感など、



ポスター発表の質疑応答 黒須春香さん(写真中央右)



学会ポスター会場での記念撮影

大学の講義・実習だけではなかなか体得できることのない医学を経験させて頂きました。研究を進めていく中では視点が定まらないこともありましたが、中野先生から頂いた鋭いご指摘だけではなく、丁寧な道しるべがあったからこそ、ここまでやり遂げることができたと感じています。」(高橋諒さん)とそれぞれ感想がありました。

看護学部学術国際交流を推進

看護学部では、平成26年2月19日（水）から25日（火）までの日程で、学術国際交流提携校のケース・ウェスタン・リザーブ大学（米国オハイオ州）から、Christopher Manacci氏（大学院急性期ケア・ナースプラクティショナーコース、フライトナーシング専攻主任）とCeleste Alfes氏（看護学部講師）を招へいし、相互の交流を図りました。

今回の招へいでは、看護学部教員に対する講演会（テーマ「Simulation in Nursing Education: A framework for Effective Integration」）、教員・医療関係者などを対象とした公開講座（テーマ「看護学教育におけるシミュレーションーヘルスケア教育のパラダイム転換ー」）を開催しました。



ケース・ウェスタン・リザーブ大学招へい者等による理事長表敬訪問
(写真中央左側: Christopher Manacci氏, 中央右側: Celeste Alfes氏)

また、平成25年度から学生の受入れを開始した大学院看護学研究科高度実践看護師コースの学生に対する講義・演習（テーマ「advanced physical examinationと胸部ユニット演習・意識障害における臨床推論（鑑別診断）」）なども併せて行われました。

更に、新病院を見学して頂くとともに、招へい教員が東洋医学にも興味を持たれていたため、船戸クリニック（岐阜県養老郡）のご協力により、当該施設を見学させて頂きました。

ケース・ウェスタン・リザーブ大学は、教員の相互研修派遣や学生の短期留学など、本学部との学術交流に対して非常に協力的であり、今後の学術交流の発展に向けて大変有意義な招へいとなりました。



看護学部教員に対する講演会

看護学部一日体験入学開催 ～看護系大学の授業を体験しよう～

平成26年3月25日（火）に「看護学部一日体験入学」が開催されました。この一日体験入学は、高校生を対象として、看護系大学における講義の実際を体験することで、大学で看護学を学ぶことへの関心を深めて頂くことを目的としています。

当日は、39名の高校生が参加し、午前中の模擬講義では、インターネットを活用した英借文を体験してもらい、インターネットを賢く使う方法を学びました。

昼食時は、レストラン「オレンジ」でグループ演習のアシスタントを務める看護学部生と歓談しながら交流を深め、休憩時間には、看護学の各領域を紹介する展示を見たり、実習衣を試着したりして過ごしました。

午後のグループ演習では、「食事バランスガイド」等を用いて、自分自身の食生活を振り返って話し合い、望ましい食生活について考えました。

参加した高校生からは、「看護のことをいろいろと聞くことができよかった。」「在学生と話すことができ参考になった。」などの意見が寄せられ、高校生にとっては貴重な体験をすることができ、とても有意義で充実した内容であったと思われます。



模擬講義



グループ演習

平成26年度看護学部新入生研修実施

看護学部では、平成26年4月25日（金）・26日（土）の2日間、知多郡東浦町のあいち健康プラザにおいて、これからの大学生活を送る上で必要な知識・技術について、講話やグループワークを通して理解を身に付けることを目的とした新入生研修が実施されました。

新入生たちは、八島妙子教務学生部長を始めとする本学部教員から、今回のテーマに沿った講話を熱心に聞いた後、7～8名のグループに分かれて、自分たちの考えたテーマについての内容をまとめ、発表を行いました。

また、昨年引き続き「あいち骨髄バンクを支援する会」から水谷久美氏を講師としてお招き、「骨髄バンクについて～患者さんの体験談を交えて～」と題した講演が行われ、実際の患者さんからの体験談を聞き、講演終了後は多数の学生から質問があり、大変盛況でした。

2日目の「在学生との交流」では、2学年次から4学年次の在学生13人が参加し、授業や大学生活、クラブ活動などについて活発な意見交換が行われ、新入生にとってはとても貴重な情報を得る機会となりました。

参加した学生からは、「他の学生と交流が深まった。」「看護学生としての自覚ができた。」などといった意見が寄せられ、これから4年間の大学生活を送る上で非常に有意義な研修になったと思われます。



水谷氏による講演風景



グループでの発表

交通安全講習会開催

平成26年4月21日（月）午後5時から大学本館たちばなホールにおいて、愛知警察署交通課総務係警部補の清水重春氏を講師に迎え、医学部・看護学部の学生を対象とした交通安全講習会を開催しました。

講師からは、愛知県は昨年度も交通死亡事故ワースト1であり、高齢者の死亡事故が多いこと、自転車も法令の変更により取締まりが厳しくなったこと及び飲酒運転は絶対にしてはならないこと等の講話があり、引き続き

DVDを鑑賞しました。「パパは風になった」と題したDVDは、交通事故の被害者の母と幼い娘が亡き父親のために巡礼を行うという内容のもので、交通事故は「殺意なき殺人だ」という言葉が印象的でした。

受講した学生がこの交通安全講習会を通じて、交通安全に対する意識を常に高く保ち、一人ひとりが常に交通安全に努めてくれることを期待します。

医学部学外体験実習体験記

愛知県内の心身障害者施設にご協力頂き、2月10日（月）から2月21日（金）にかけて医学部2学年次生が学外体験実習を行いました。心身障害者の人たちと接する初めての体験は、医学生に大きなインパクトを与えたようです。実習を終えた学生の感想文を紹介します。

病院実習を通して

実習施設：独立行政法人国立病院機構 東名古屋病院
2学年次生 田崎 真佑子

今回、私たちは東名古屋病院の中の障害者施設で見学をさせて頂いたことにより、たくさんの方を目で見て、話を聞き、肌で感じる事ができ、とても貴重な体験をさせて頂いたと思います。

重度の障害者の方々というのは、テレビでしか見たことがなく、私の周りにもいないので正直最初はお会いするのに少し緊張してしまったり、怖さも少々ありました。テレビで取り上げられているような人がたくさん一つの場所に集まっている、と身構えてしまいました。しかし、私がこの病院を見学させて頂いて、とても優しさにあふれた温かい場所であるという印象を強く受けました。それとともに、スタッフの笑顔や細かい気配りに感動しました。

昼食の時間にスタッフさんからこんな話を聞きました。小学生くらいの女の子の話です。「この子はね、この施設に入ってきたときは食べる動作も知らなかったし、食事を嫌がっていた。でも、今では自分で口を開けて食べ物を入れ、飲み込むこともできる。ここまでできるようになるのに、5年もかかったわ。」とおっしゃっていました。話によると、これが食べ物だよ、食べ物っていうのは口に入れるものなんだよ、食べる時には口を開けるんだよ、食べ物が口に入ったら口は開けっ放しにしないで閉じるんだよ、口に入った食べ物は奥の方にもっていくんだよ、そこで噛むっていうことをしなきゃいけないんだよ、その後はごっくんって飲み込まなきゃいけないんだよ、というように私たちが普段全く意識せずに当たり前に行う“食べる”という動作をできるようにするために、一つひとつ丁寧に毎日訓練したそうです。師長さんが、食べることをここまで嫌がっているのなら、流動食にしてもいいんじゃないかと言ったそうですが、スタッフさんは諦めなかったそうです。その結果5年もかかりましたが、食べるという動作ができるようになったそうです。私は、その諦めなかったスタッフさんの姿勢にとっても心を打たれました。

また、利用者さん一人ひとり口の中のどこに食べ物を置いてあげればいいのか、ここに置いたら吐き出してしまおう、といった細かいことにまで目を向け、気を配り、利用者さんに合ったケアができるように情報をみんなで共有していました。細かいところまで見ていて気付いてあ

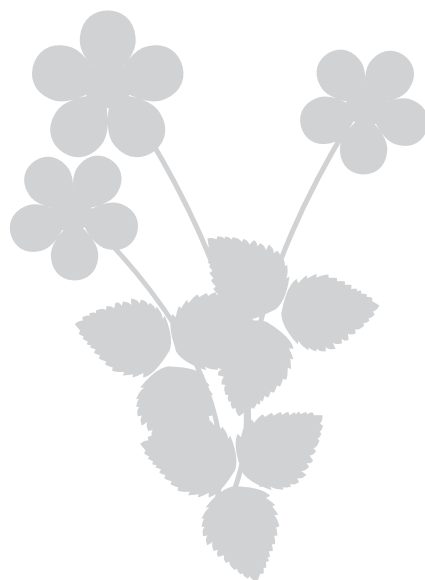
げられていて、利用者さんにとって生きていくのに最高の場所だと思いました。

スタッフさんたちの仕事はとても大変そうでしたが、それを全く感じさせない笑顔で利用者さんに接している姿にとっても刺激を受けました。

また、利用者さんは毎日一生懸命生きておっしゃっていました。まったくその通りだと思いました。私が、お目にかかった多くの利用者さんのうち、話せる方は一人だけでした。みな意思疎通もできなく、喜怒哀楽も表情では読み取るのが難しい利用者さんが大半でした。そんな中、スタッフさんの呼びかけに必死で答えようとする動きやしぐさを見て、頑張っているんだと伝えているように見えました。

利用者さんの中には、生まれつきの先天性の障害の方もいれば、悲惨な過去を経て障害を持ってしまった方もいて、それぞれ今後もいつまで生きられるかが分からなかったりと、状況は様々ですが、今を必死に生きている彼らを見て強い生命力を感じました。

とても良い経験でした。今後、このような施設が増えたいと思うし、この病院実習も続けてほしいと思います。



ケース・ウェスタン・リザーブ大学短期留学体験記

看護学部では、米国ケース・ウェスタン・リザーブ大学フランシス・ペイン・ボルトン看護学部と教員・学生の交流を含む包括的な相互交流を行っています。平成26年3月に、看護学部生3名が留学しました。短期留学を終えた学生の体験記をご紹介します。

Case Western Reserve University 短期留学を終えて

看護学部4学年次生 鯛 百合名

平成26年3月15日（土）から3月24日（月）までの10日間、アメリカ合衆国における医療・保健・福祉並びに看護教育・実践について学ぶことを目的として、本学と学術国際交流協定を締結しているアメリカ合衆国オハイオ州にあるケース・ウェスタン・リザーブ大学フランシス・ペイン・ボルトン看護学部での短期留学に参加しました。10日間という短い期間ではありましたが、帰国時には帰りたくないと思うほど多くの学びがあり、充実した時間を過ごすことができました。

今回の短期留学では3学年次の3名が参加し、同大学の看護学生とともに看護学基礎教育の講義、演習、実習への参加やホスピス、がんセンターなどの医療・福祉施設への訪問を行いました。また、同大学の日本語クラスの講義へ参加し、日本の文化についてのプレゼンを英語で行うなど様々な学部の学生とも交流することが出来ました。

今回の短期留学を通して特に印象的であったものは、講義や演習・実習に参加している学生の学習に対する姿勢です。講義や演習では積極的な質問や発言があり、病棟実習では、学生が自信をもって患者さんや家族と接し、スタッフの質問に堂々と答える姿がみられました。また、同大学では学生の身分であっても患者さんに注射や点滴を行っており、学生の積極的な学習姿勢が、技術力に繋がっているのだと実感しました。看護学生のほとんどは、自分がどのような看護師になりたいかといった目標をしっかりとっていて、志の高さをも感じることができました。学生との交流を通して、改めて自分の学習への姿勢について考えさせられる良い機会となりました。

また、訪問した病院はアメリカでもトップレベルの医療技術を誇っており、医療設備や病院の構造自体も非常に素晴らしく、充実したものとなっていました。しかし、アメリカでそのような高い質の医療を受けることが出来るのは金銭的に余裕のある人々に限られるという高額な医療費の問題もあり、医療格差が極端に現れている現実を知ることができました。アメリカと日本の医療を比べ、日本でもこうであればいいなという面もありましたが、日本の医療の素晴らしいところにも多く気づくことができました。

私が留学に参加しようと思ったきっかけは、海外での医療や文化、価値観に触れることで、広い視野を身につけたいと思ったからです。今回の短期留学で私が体験することができたのは、アメリカの医療のほんの一部ではありますが、日々色々なことを感じることができました。文化や価値観の違いはあっても「看護師」という職業を通して人と関わり、誰かの支えになりたいという思いは同

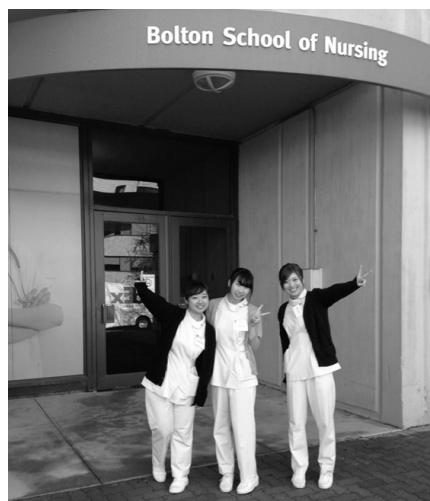
じであるということを感じることができた貴重な体験となりました。

自分の英語力に自信がなく、スムーズにコミュニケーションがとれるのか、最初はとても不安な思いを抱えていましたが、親切に何度も説明をしてくれた実習先の学生や様々なことを教えてくださった指導者の方と出会い、人との絆を感じ、最初の不安がなかったかのように、本当に楽しい、実りのある時間を過ごすことが出来ました。そして、初めての体験ばかりの慣れない海外で、留学に参加した3人で協力しあって生活したことは、一人ひとりが成長するきっかけになったと思います。

最後に、私達を引率し、サポートしてくださった看護学部の近藤真治教授、準備などでお世話をしてくださった佐々木裕子准教授を始め、短期留学の実施に向けて協力してくださった全ての関係者の方々に心からの感謝を申し上げます。



研修プログラム修了証を手に記念撮影（左端：鯛さん）



看護学部棟から病院実習へ出発

＝ 地域連携 ＝

長久手市・株式会社長久手温泉との連携事業 健康イベント「平成25年度特定保健指導(動機づけ支援)」開催

平成26年2月9日(日)長久手市と長久手温泉ござらっせと本学による提携事業として、健康増進イベント「平成25年度特定保健指導(動機づけ支援)」が開催されました。

当日は、長久手市民21名にご参加頂き、最初に長久手市福祉の家2階会議室において、長久手市の国保栄養士による栄養の話を受講しました。次いで長久手温泉ござらっせの食事処「さつき亭」に移動し、温泉の効能についての話を聞き、その後、利用客から大好評の健康に良いランチを参加者全員で楽しく頂きました。午後からは、本学の牛田享宏運動療育センター長から痛みに関する講義があり、参加者は熱心に聴講しました。イベントの最後には機能回復訓練室において、本センターの長谷川共美トレーナーによる体操指導があり、参加者にとって大変充実した一日を終えました。

参加頂いた市民の方々からは、「実際に役立つ話を聞くことができ大変有意義だった。」「今日学んだ体操を自宅でも実行したい。」との感想を頂きました。

運動療育センターでは、これからも地域住民の皆さまの健康づくりに役立つイベントを開催しますので、是非ご参加ください。



運動療育センター講演会開催

平成26年3月22日(土)大学本館たちばなホールにおいて、運動療育センター講演会が開催されました。

講演会に先立ち、本センターへ大変熱心に来館されている来館回数上位3名の方々に、牛田享宏運動療育センター長から表彰状と副賞が贈られ、会場は温かな拍手に包まれました。

続いて、本センターの小笠原トレーナーから、「元気が出る体操」のデモンストレーションや参加者と一体になっての実技指導があり、大変好評を得ました。

講演会講師には、長年中日ドラゴンズの選手として活躍され、昨年まで同球団の1軍打撃コーチを務められた彦野利勝氏をお招きし、「あきらめないチャレンジ」をテーマに、痛みと向き合っている方々に大変役立つお話やドラゴンズファンには大変興味深いお話の数々を語って頂きました。

特に、膝蓋腱断裂から厳しいリハビリを経て現役にカムバックした経験を、当時リハビリを担当した理学療法士である中田昌俊氏とともに、スライド等を投影しながら



講演される彦野利勝氏

ら一般市民にも分かりやすく解説されたお話に参加者は深い感銘を受けていました。

講演会終了後は、会場ロビーにてサインや写真撮影を求める参加者が彦野氏を幾重にも囲み、いつまでも談笑の輪が広がっていました。

定年退職教授最終講義

今年3月で定年を迎えられた3名の教授の最終講義が、大学本館たちばなホール及び看護学部棟N301講義室において行われました。

先生方には長きにわたり本学発展のためご尽力頂き、多くの教を賜りました。

ここに、先生方の最終講義の様子についてご紹介いたします。

二村 真秀 教授 2月5日（水）

【新生児医療とともに】

二村先生は、平成18年4月に本院生殖・周産期母子医療センターの開設に当たりご着任されました。以来、精力的にセンターの運営に取り組み、本学のNICUの発展に大変なご尽力を頂きました。

また、医学部学生に対する新生児医療分野の講義を始め、臨床実習やクリニカル・クラークシップにおいては、医療人としての知識・技術を習得させるべく熱心に教育指導を行ってこられました。加えて、臨床研修医・若手医師の研究指導や、看護師・助産師の育成にも力を注いでこられました。

最終講義では、先生が新生児医療をご自身の専門とするに至った恩師との出会いの話から、新生児の感染症を始めとしたこれまでの研究内容について、臨床的な診療データ等を提示して詳しくご講義くださいました。

先生のお話は、この30年間で新生児医学の著しい進歩を目の当たりにされながら診療・治療につながる研究を精力的に続けてこられた様子や、日々進歩している新しい治療方法が新生児医療に数多く取り入れられていることで、多くの小さな命が救われてきたことを伺い知ることができるものでした。

また、先生が常に母子の絆、家族の絆に心を寄せて診療にあたってこられた様子は、先生のお人柄や誠意が感



じられ、聴講した人々に大きな感銘を与えていました。

先生は、若手医師・看護師・学生の皆さんに向けて、「どのような理由からでもよいので、これだ！という道が開かれるとよいと思う。その道を進めばきっと後悔することはないと思う。」とのメッセージを送られました。

続けて、小児科医になって30年余りの最後の8年間を本院生殖・周産期母子医療センターにおいて務めることができたことに感謝していると話され、5月に開院となる新病院では、関係スタッフはもとより学生も共に一丸となって盛り上げていかれることを祈念しますとエールを送られました。

最後に、これまで関わりのあった方々への感謝の言葉をもって講義を締めくくられました。

伊藤 孝治 教授 1月24日（金）

【看護師と看護 一体験的回想と希望一】

伊藤先生は、平成23年4月に成人・在宅看護学（療養生活支援）の教授として着任され、3年間という短い期間でしたが、学部教育や在宅看護学領域の発展に多大なる貢献をされました。また、学部運営においても長年のご経験に基づく多くのアドバイス等を頂きました。

先生が大学を卒業された頃は、男性看護師（当時は看護師）の占める割合が全体の約0.6%という状況で、男性看護師が社会的に認知されていなかった時代でした。講義では、こうした状況下で、ご苦勞されながら医療に携わってきた男性看護師としての貴重な体験談をお聞きすることができました。

職場を臨床から教育へと移られた後は、看護教育の大学化という時代の流れもあり、赴任先の各大学において、学生教育のほかに、看護学部の新設やそれに伴う短期大学の閉校という業務にも多くの時間を費やしたことなどもお話しくさしました。

最後に、看護の発展には男女共同ということが大切で



あり、本学部発展の課題は、適格な人材育成の努力と共通目標の周知・共有と協働意識の向上であると述べられ、講義を締めくくられました。

男性看護師への励ましと、ユーモアを交えながらの講義は、先生の温かく明るいお人柄を感じられるものとなり、参加者は伊藤先生との別れをいつまでも名残惜しんでいました。

鈴木初子 教授 2月7日（金）

【愛知医科大学教員生活に感謝をこめて—看護教育28年の足跡—】

鈴木先生は、看護学部開設4年目（平成15年4月）に基礎看護学領域へ着任され、これまで11年間にわたり、学部・大学院教育に当たられました。その間、基礎看護学領域の基盤づくりや大学院看護学研究科の設置、新カリキュラムの導入などにも尽力されるとともに、近年では大学院へのNP（ナースプラクティショナー）教育制度導入に向けた活動にも力を注がれ、平成25年4月には、大学院看護学研究科に高度実践看護師コース（クリティカルケア（周術期））を設置するに至りました。

講義では、ご自身の16年の臨床経験と28年の教育経験について詳細にお話して頂きました。特に先生は、体温研究、産業衛生、看護技術、医療安全、看護管理など幅広い研究を活発に行われており、代表的な研究についての成果等を述べられました。

また、学生に向けて、「看護は今後ますます変革していくので、その変革についていけるように努力をして頂



きたい。私の人生は努力の人生であった。容易なことばかりの人生は存在しないし、楽しいことばかりも存在しない。生きるとはそういうこと。苦難なことがあっても立ち上がる力を持ってほしい。そして自分の考えを大切にしてほしい。新たなことに挑戦して看護を発展させてください。」とメッセージを贈られました。

最後に、学生、卒業生、教職員の皆さまのご協力・ご支援に支えられて本日を迎えることができましたと謝辞が述べられました。

—退職を迎えて—

“長年の勤務お疲れ様でした”

長年にわたり本学、本院に勤務され、本年3月31日をもって定年退職又は期間満了退職された方々をご紹介します。なお、定年退職後も再雇用等により本学にご尽力頂ける方もみえますので、引き続きのご活躍をご期待いたします。退職に当たり、一言メッセージを頂きました。



二村 真秀 先生
(生殖・周産期母子医療センター・教授)

定年退官を迎えて

愛知医科大学にお世話になり8年が過ぎ、新生児科医として定年退官を迎えることができました。皆さまのお力添えを得て周産期医療の仕事が出来たことに深く感謝しています。ありがとうございました。

前任の地では、多くの新生児症例を経験しましたが、

新生児科医として「産婦人科の先生方と一緒に仕事ができる周産期センターに勤務したい。」との思いが次第に増してきていました。ちょうどその時、本院周産期センター開設に当たって、赴任することができたことは幸せなことでした。以来8年が経ち、開設当時には学会の先輩の先生から、「軌道に乗せられるのには10年かかるよ。」と言われて、「その通りだなあ。」と思っています。その意味では、まだまだ途上にある本院の生殖・周産期母子医療センターです。次の世代にバトンタッチしましたが、引き続き皆さまからの厚いご支援を頂くように改めてお願いいたします。



鈴木 初子 先生
(看護学部・教授)

10年間の勤務を辞すに当たって

愛知医科大学には、開学4年目の完成年次を迎える年に着任しました。学部の委員会活動は、長く学生委員会次長、学務委員長として学生生活や学業支援に助力してきました。

着任時は成人看護学と基礎看護学の2領域の講義、演習、実習を担当しましたが、中でも病院実習では、過去に体験したことのない場面に多々遭遇し、驚愕と失望の連続でした。しかし、現在は看護部職員の看護教育に対

する姿勢の変容と看護教育への積極的な関与、かつ絶大な協力によりいくらかの問題はあるものの、実習環境、指導体制が相当改善されたことは喜ばしいことであり嬉しいことです。

本学にとって、看護学部ができた意味は大きく、看護学部の存在が大学病院、看護部の変革、発展に良い影響を与え、これからも更に進化すると自負しています。また、優秀な看護学部の卒業生が愛知医科大学病院の看護部を支える存在となり、変革の起爆剤となること信じ、期待するものです。

無事に今日を迎えられたことに感謝し、愛知医科大学の更なる発展を祈念します。

今後も看護教育にご支援を賜りたいと願いつつ、今までのご支援、ご協力に深謝いたします。



佐藤 芙佐子 先生
(看護学部・教授)

退職にあたって

平成20年4月に教授として着任し、平成21年度には看護実践研究センター認定看護師教育課程(救急看護・感染管理)を開講することができました。また、大学院看護学研究科では、急性・重症患者看護学領域の教育を担当し、平成21年度から同領域の専門看護師(CNS)教育課程を開講しました。

平成22年度には、厚生労働省において「チーム医療の推進」の検討が行われる中、本学における高度看護実践者(特定看護師)教育の推進を目指した「大学院高度実践看護師コースの設置準備委員会」のメンバーとして、

大学及び病院関係者との度重なる検討に携わり、平成25年4月のクリティカルケア(周術期)コース開設に寄ることができました。

学部運営においては、看護学部学術国際交流委員会の委員長として、国際交流活動の推進に努めました。特に、平成20年度に協定を締結した米国ケース・ウェスタン・リザーブ大学との交流では、教員招聘による講演会、学生の短期留学や視察研修などを進めてきました。それらの活動が毎年活発に継続されていることは喜ばしいことです。

短い在職期間でしたが、「チーム医療の推進」、「看護師の役割拡大」、「国際性の育成」が重要となっているこの時期に、愛知医科大学の恵まれた環境下で、このような教育活動に携わる機会を頂きました。本学の関係者の方々の多大なご支援に深く感謝いたしますとともに、本学の今後ますますのご発展を祈念いたします。



坪内 政義 さん
(医学情報センター・事務長)

30数年を遡ると、手書きからコンピュータへと仕事が変わる時代。15年前には図書館移転に追われる日々もありました。新病院を仰ぎ見て今昔の感あり。改めて皆さまの温情に感謝申し上げます。



尾嶋 義信 さん
(メディカルクリニック事務室・施設管理技士(担当課長))

多くの方に支えられ無事定年を迎えることができました。皆さまの協力があつたからこそと感謝とお礼の気持ちでいっぱいです。信頼される病院へ躍進!愛知医科大学の更なる発展をお祈り申し上げます。



山形 由美子 さん
(看護部・副部長)

8年前に着任し、採用・看護学部と共同し継続教育・実習調整などを担当し、皆さまに支えられながら充実した日々でした。再雇用として新病院でも働けることに感謝です。愛知医科大学病院の益々の発展をお祈り申し上げます。

新病院への患者移送を無事完了

新病院の開院に伴い、平成26年4月30日（水）・5月1日（木）の2日間にわたり、新病院への患者移送が行われ、初日は重症系9名、2日目は一般系323名の患者さんが無事新病院へ移送されました。

搬送要員として、医師300名を始め、看護師、コメディカル、事務職員及び医学部・看護学部の学生ら総勢約1,100名が参加しました。

今回の移送に当たっては、新病院建設委員会の下、羽生田正行教授・副院長（外科学講座（呼吸器外科））がリーダーを務める患者移送TFを立ち上げ、「何よりも安全な移送」を目指して1年前から綿密な計画を立てて本番に臨みました。

移送当日は、早朝から移送班が体育館に集合し、班編成を行いました。三宅養三理事長のあいさつの後、野浪敏明病院長の開始宣言により移送が開始されました。

実際の搬送では、佐藤啓二学長（新病院建設委員会委員長）が中継地点での搬送を指揮し、患者さんが建物外に出た際に日差しを遮るために日傘で顔を覆うなど、きめ細やかな配慮を行って、編成ダイヤどおりに無事に移送を終えることができました。



参加職員で「えいえいおー！」のかけ声とともに



患者移送を行う参加職員

卒後臨床研修修了証授与式挙行

卒後臨床研修修了証授与式が、平成26年3月17日（月）午後6時から大学本館701会議室において挙行されました。

式は、野浪敏明病院長を始め、春日井邦夫卒後臨床研修センター長及び各副センター長等が出席の中、整然と且つ厳かに執り行われました。

始めに、春日井センター長から「まずは初期臨床研修を無事全員が修了されましたことをお祝い申し上げます。皆さんはこの2年間で医師として立派に成長され大変誇らしく思っております。愛知医科大学病院において初期臨床研修を行ったことに自信を持つとともに、ここで得た経験、知識を基に今後の後期臨床研修に励んでください。そして、研修センターで共に学んだ仲間意識を胸に、社会に貢献すべく努力を続けて下さることを期待します。」と告辞があり、各出席者からの祝辞の後、春日井センター長から一人ひとりに臨床研修修了証が手渡されました。



参加者での記念撮影

今回修了した22名（研修医20名、研修歯科医2名）のうち18名は本院の専修医として、専門医、認定医や学位取得を目指すことになります。

本院での臨床研修医として修得した知識、技術及び経験を生かし、各々がより一層の精進が期待されます

病院長表彰式開催

平成26年3月6日（木）大学本館たちばなホールにおいて、病院長表彰式が開催されました。

これは、病院における日頃の診療業務に貢献している職員・部署等に目を向けて、感謝と激励の意を込めて病院長表彰したものです。

受賞者からは感謝の言葉があり、今後も新病院に向けた現病院の活性化を更に推進して頂くよう期待されています。

受賞者は、次のとおりです。

1 チーム医療部門

○感染対策チーム（ICT）

【表彰理由】 院内における感染予防や発生時の迅速な対応を任務として日夜活躍されている。昨年末のインフルエンザ院内感染発生時には、各病棟のリーダーとして感染拡大を防ぎ、その終息に大きな力を発揮。

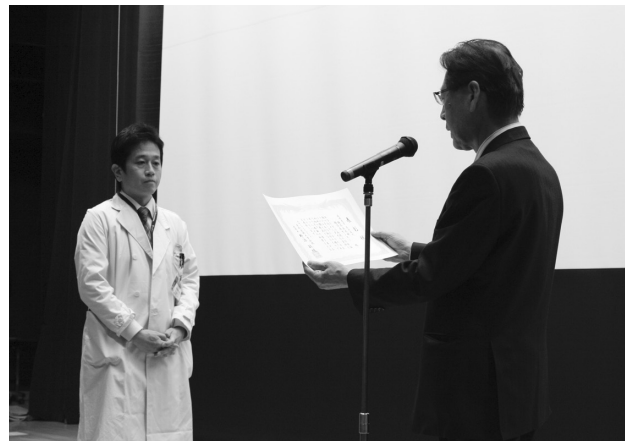
2 医師部門

○糖尿病内科・糖尿病センター

【表彰理由】 本院の糖尿病治療として糖尿病を合併する全ての患者に全病的に対応され、本院のDM治療のレベルの向上に大きく貢献。

○臓器移植外科

【表彰理由】 一昨年から始めた腎移植は、昨年は年間で約30例施行された。この症例数は全国の専門施設と肩を並べるレベルであり、短期間でここまで本院の腎移植医療を発展させた点を高く評価。



3 看護部門

○外来化学療法室 看護師

【表彰理由】・外来化学療法法のルート確保を看護師が担当
・外来診療単価（注射）アップへの貢献

○中央手術室 看護師

【表彰理由】・手術件数増加及びロボット手術・腎移植手術などへの積極的対応
・延長手術介助の対応

4 中央部門

○リハビリテーション部

【表彰理由】 近年リハビリテーションの果たす役割は重要性を増している。毎年リハビリテーションの施行時間数は着実に伸びており、社会的ニーズに対応できるようになってきている。また、病院経営上も貢献。

愛知医科大学病院「大規模災害対応マニュアル」 第19回日本集団災害医学会において最優秀賞を受賞

平成26年2月24日（月）～26日（水）東京国際フォーラムにて開催された、第19回日本集団災害医学会総会・学術集会の「病院災害対策マニュアル・コンペティション」において、本院の「大規模災害対応マニュアル」が最優秀賞を受賞しました。

このコンペには、全国から22病院が参加し、会場の特

設ブースにポスター及びマニュアルの現物を展示して、学会参加者による投票により順位決定が行われました。本院から提出したマニュアルは、大学病院のホームページにも掲出してあり、必要に応じてダウンロード（QRコード付き）が可能な点などが高く評価されました。

医療安全講演会開催

平成26年2月6日（木）午後5時30分から、大学本館たちばなホールにおいて、医療安全講演会が開催されました。

今回で31回目となる講演会は、株式会社損保ジャパンの足立尚人氏を講師にお迎えして、「ヒューマンエラーと医療安全～インシデント報告の役割～」についてご講演を頂きました。身近な事例を題材にただけに参加した職員は皆、熱心に聞き入っていました。

当日受講できなかった職員については、講演の様様を録画したDVD上映会を開催、貸出しを行っておりますので、医療安全管理室（内線34258）までお問い合わせください。

医療安全管理室では、全ての職員に医療安全の意識高揚が図れるよう、今後もより実践的な研修会を開催していく予定であります。

保険診療に関する講演会開催

臨床研修病院においては、全職員を対象とした保険診療に関する講習が、年2回以上実施されていることが必須とされているため、平成26年3月6日（木）午後5時30分から大学本館たちばなホールにおいて、株式会社メディセオの宮永泰式氏から「平成26年度診療報酬改定について」と題し、講演会が開催されました。

講演会では、始めに診療報酬改定の概要、重点課題、2025年（平成37年）にむけての基本的な考え方を解説して頂き、次に医療機関の機能分化・強化と連携・在宅医

療の充実等について解説して頂きました。まとめとして、厚生労働省は、①急性期病床（7対1病床）を削減すること、②退院後の在宅復帰を促進させること、③大学病院の一般外来を縮小させること等を本気でスタートさせ、非常に厳しい改定であると締め括って頂きました。

講演会は医師、看護師、コメディカル等の幅広い職種から約220名の参加があり、診療報酬改定に対する関心の高さを感じる講演会でした。

臨床研修医ガイダンス開催

平成26年4月1日（火）から9日（水）まで、新人臨床研修医28名及び研修歯科医2名を対象に、本院における臨床研修に必要な基本的な事項についての「臨床研修医ガイダンス」が開催されました。

野浪敏明病院長及び春日井邦夫卒後臨床研修センター長から医師としての心構え等についての話しから始まり、今村明副センター長による「研修医他己紹介」と題するグループワーク（GW）、電子カルテの操作方法、輸液ポンプ・シリンジポンプ等の実習、看護師の役割、業務を通してチーム医療の中での医師の役割、病棟における医療安全を理解する病棟医療安全研修、BLS（一次救命処置）研修に加えて、医学部及び看護学部の新入生に研修医がBLSの指導を行うBLS指導者講習会を実施し、いわゆる「屋根瓦方式」の指導を行いました。

また、手洗いの正しい方法やマスク等の个人防护具の使い方などの感染予防研修、更に採血実習と縫合実習が行われました。



最後に春日井邦夫センター長から、臨床研修医一人ひとりに臨床研修許可証が手渡され、8日間のガイダンスが終了しました。このガイダンスの内容は、参加した臨床研修医の方々にとって、将来必ず役立つものと期待されます。

DMAT（災害医療派遣チーム）車両を整備

このたび本院高度救命救急センターは、愛知県による災害拠点病院の補助金（平成25年度地域医療再生施設・設備整備費補助金）を活用して、DMAT（災害医療派遣チーム）車両を整備しました。

このDMAT車両は、実際の災害派遣はもとより、各種訓練の際にも活用するための車両で、市販のSUV（スバル：フォレスター）をベースにして、緊急車両指定・デジタル消防無線・衛星携帯電話・デジタルMCA無線・100Vインバーターなどを装備しました。これらは、災害時の通信手段の確保に主眼を置き整備したもので、複数の通信手段によって入手した情報により、適確な災害医療活動を展開することが可能になるものと期待されています。

また、今後はドクターヘリ事業を補完する目的で、ラピッド・レスポンス・カー・システム（Rapid response car system：医師がいち早く救急現場に出向き、初期診



DMAT車両

療を行って傷病者の安定化を図り、救命率の向上を目的とするシステム）の導入も検討されており、その際の移動用車両としての活用も予定されています。

加齢医科学研究所

30周年記念学術講演会開催

平成26年2月21日（金）大学本館201講義室において、加齢医科学研究所30周年記念学術講演会が開催されました。

本講演会は、昭和58年4月に設置された加齢医科学研究所が、30周年を迎えたことを記念して研究者の方々を対象とした学術講演会という形で実施されました。

開催に当たり、佐賀信介医学部長から、同研究所設置の背景や歴史について説明がありました。

続いて講演会が、「神経変性の機序を探る－神経病理から最先端への架け橋をめざして－」をテーマに、加齢医科学研究所長の吉田真理教授から「病理像からみえる神経変性の病態」、東京都医学総合研究所認知症・高次

脳機能研究分野の長谷川成人分野長から「分子生物学からみる病態」、内科学講座（神経内科）の岡田洋平准教授（特任）から「iPS細胞を用いた神経疾患研究」と題した3部構成で行われました。各講演後には、研究者間で活発に意見交換が行われ、盛会裏に終了しました。

加齢医科学研究所は、現在、本邦の神経病理学の重要な拠点研究所となっていますが、今般30周年という一つの節目を迎え、これまでの学内外の皆さまのご理解やご支援に深謝するとともに、分子生物学やiPS研究などとの共同研究を更に推進し、より質の高い発展性のある研究の発信を使命とし、スタッフ一同一丸となり取り組んでいきます。

第27回日本医師会認定産業医研修会を開催

「産業医としてメンタルヘルスをどう取りあつかうか」をテーマに、平成26年3月15日（土）大学本館講義室において、日本医師会認定産業医研修会を開催し、94名の先生方にご参加頂きました。

最初に、社会保険労務士の柳野誠氏から「職場復帰支援プログラム」について、愛知産業保健推進センターでの調査などをお示し頂きながら詳しく解説頂きました。また、トヨタ自動車株式会社の産業医であり、前産業保健科学センター准教授であった渡邊美寿津先生には、「産業医と専門医・外部医療機関との連携」について豊富な事例を紹介しながら、連携のポイントについてわかりやすくご説明頂きました。

続いて、ルーセントリワークセンター・センター長の

産業保健科学センター長 小林 章雄

柴田ゆり氏に、ホワイトカラーを中心としたリワークプログラムの内容や復職に至るまでの流れについて、その実際を詳しくご紹介頂きました。また、愛知淑徳大学の古井景教授には、「職場のメンタルヘルス 心の発達と職場不適応」について、主に新型うつ病についての発達の視点からの理解や対応、復職支援等についてお示し頂きました。

今回は、年度末にもかかわらず、参加者が多くメンタルヘルスへの関心が高いことがうかがわれました。

産業保健科学センターでは、今後も継続して産業医研修会を開催し、働く人々を支援するための産業保健活動を支援するとともに、多くの情報提供を行って参ります。

解剖学・脳神経外科手術手技セミナー開催

平成26年3月3日（月）医学部解剖実習室において、医学部学生を対象とした「解剖学・脳神経外科学手術手技セミナー」が開催されました。

このセミナーは、「臨床医学」特に外科手術手技の視点から解剖学をより深く学ぶ目的で行われたものであり、医学部2～5学年次生（現3～6学年次生）の希望者約30名が参加しました。

当日は、午前9時から午後5時まで、脳神経外科学講座の渡部剛也准教授及び本院脳神経外科の安田宗義准教授（特任）の指導により、手術用顕微鏡などを用いて脳神経外科手術のデモンストレーションを行いました。参加した学生は、解剖実習とは異なる手技による中枢神経系の剖出を目の当たりにして、臨床医学に対する意欲と興味を更に向上させることができました。

本セミナーのような基礎医学と臨床医学を有機的に融合させた医学教育の必要性は、今後更に高まってきます。次年度以降も継続して本セミナーを開催し、本学医学教育の質的向上に努めたいと思います。

（解剖学講座・教授 中野 隆）

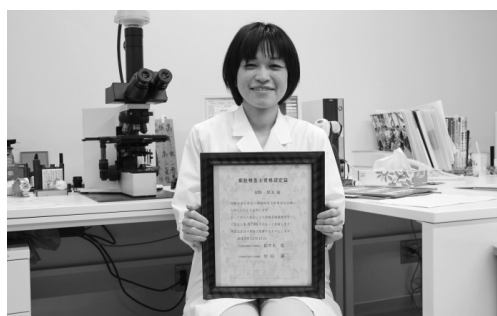


病院病理部 水野里美臨床検査技師 細胞検査士認定

本院病院病理部の水野里美臨床検査技師が細胞検査士に認定されました。

細胞検査士は、細胞病理検査（細胞診）により、癌の早期発見・早期診断の為、「がん細胞」を発見することが主な検査実務であり、日本臨床細胞学会による筆答・実技の両面にわたる試験に合格した技師に与えられている資格です。また、資格取得には、臨床検査技師又は衛生検査技師の国家試験に合格し、細胞診業務1年以上の実務経験を有するなどの受験資格が定められています。

認定を受けた水野技師から「横井豊治教授を始め諸先生方、先輩方から親身にご指導頂き、おかげさまで合格することができました。応援して下さいた皆さまには、



水野臨床検査技師

よりよい環境を与えて頂き、感謝しています。責任の重さを忘れることなく、この先業務に取り組んでいきたいと思っております。」と感想がありました。

看護部 岡前朋子看護師 日本環境感染学会「上田Award」受賞

本院看護部の岡前朋子看護師が、平成26年2月14日（金）・15日（土）国際館パミール（東京都港区）で開催された第29回日本環境感染学会総会・学術集会において、第5回日本環境感染学会「上田Award」を受賞されました。

これは、日本環境感染学会誌に掲載された「基質拡張型β-ラクタマーゼ（lactamase:ESBL）産生Klebsiella oxytocaのアウトブレイクの対応に関する検討」が優秀論文として評価されたものです。

受賞された岡前看護師から、「このような名誉ある賞を拝受したことを大変光栄に思います。ご指導頂きました三嶋廣繁教授、山岸由佳准教授、加藤由紀子副看護部



長には深く感謝いたします。今後も、実践・研究に精進したいと思います。」と感想がありました。

● 一般財団法人愛知医科大学愛恵会 ● 主催公演事業

平成25年度における第2回及び第3回主催公演事業を次のとおり開催しました。

一般財団法人愛知医科大学愛恵会では、平成26年度においても、引き続き主催公演事業を企画・実施して参りますのでご期待ください。

平成25年度第2回主催公演事業

平成26年2月14日（金）病院玄関ホールにおいて、「東洋と西洋の出会い・愛のバレンタインコンサート」と題して、「オユンナ&馬頭琴とヴァイオリンとピアノの饗宴」によるロビーコンサートを開催しました。

シンガーソングライターのオユンナさんの声量豊かな熱唱と、満天の星空、そして広大な大草原を想像させる馬頭琴・モンゴル琴の演奏には大いに感銘を受けました。

折しも、当日は降雪に見舞われ非常に寒い日でしたが、会場は満席で熱気に包まれ、楽しいひと時を過ごすことができました。



平成25年度第3回主催公演事業

平成26年3月27日（木）病院玄関ホールにおいて、「オカリナコンサート」を開催しました。

オカリナ奏者の鈴木夏織さんによる指揮・演奏で、「竹田の子守唄」「川の流れのように」などの演奏があり、最後には、この季節にぴったりの「さくらさくら」が演奏され、フィナーレを飾りました。

また、会場において、アンデルセン童話集3冊セットが、入院中の患者さん15名にプレゼントされました。



学 術 振 興

学 位 授 与

◆大学院医学研究科



Odkhuu Erdenezaya

学位授与番号 甲第416号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「Inhibition of receptor activator of nuclear factor- κ B ligand (RANKL)-induced osteoclast formation by pyrroloquinoline quinine(PQQ)(ピロキノリンキノン(PQQ)によるNF-kappaB活性化受容体リガンド(RANKL)誘導破骨細胞形成の抑制)」

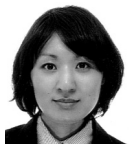


寺島 嗣明

学位授与番号 甲第420号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「Flavopiridol inhibits interferon- γ -induced nitric oxide production in mouse vascular endothelial cells(フラボピリドールはマウス血管内皮細胞におけるインターフェロン- γ 誘導一酸化窒素産生を抑制する)」



藤堂 真紀

学位授与番号 甲第417号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「Drug Interaction Between Sunitinib and Cimetidine and Contribution of the Efflux Transporter ATP-binding Cassette C2 to Biliary Excretion of Sunitinib in Rats (ラットにおけるスニチニブとシメチジンの薬物相互作用とスニチニブの胆汁排泄に対する排出トランスポーター ATP-binding Cassette C2の寄与)」



西上 智彦

学位授与番号 甲第421号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「Development of Heat Hyperalgesia and Changes of TRPV1 and NGF Expression in Rat Dorsal Root Ganglion Following Joint Immobilization(関節不動化後の熱性痛覚過敏と脊髄後根神経節におけるTRPV1及びNGFの発現変化)」



Damdindorj Lkhagvasuren

学位授与番号 甲第418号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「Assessment of the long-term transcriptional activity of a 550-bp-long human β -actin promoter region (ヒトベータアクチン遺伝子プロモーター領域の550塩基対の配列が有する長期的な転写活性の検討)」

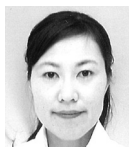


野々山 宏

学位授与番号 甲第422号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「Evidence for bilateral endolymphatic hydrops in ipsilateral delayed endolymphatic hydrops:preliminary results from examination of five cases (同側型遅発性内リンパ水腫における両側内リンパ水腫のエビデンス)」



小西 裕子

学位授与番号 甲第419号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「A system for the measurement of gene targeting efficiency in human cell lines using an antibiotic resistance-GFP fusion gene (抗生剤耐性遺伝子-EGFP融合遺伝子を用いたヒト細胞株の遺伝子ターゲティング効率の定量)」

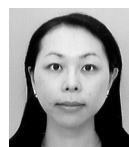


Huq Muhammad Aminul

学位授与番号 甲第423号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「4G/5G Polymorphism of the Plasminogen Activator Inhibitor-1 Gene Is Associated with Multiple Organ Dysfunction in Critically ill Patients (Plasminogen activator inhibitor-1の4G/5G遺伝子多型と多臓器不全の関連)」

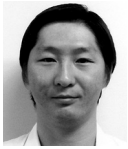


麦 雅代

学位授与番号 甲第424号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「REM睡眠行動障害患者における嗅覚障害の検討」

**Mendjargal Adilsaikhhan**

学位授与番号 甲第425号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「Pifithrin- α , a pharmacological inhibitor of p53, downregulates lipopolysaccharide-induced nitric oxide production via impairment of the MyD88-independent pathway (p53阻害剤であるピフィスリン- α は、MyD88非依存性経路を抑制してリポ多糖体誘発一酸化窒素産生を減弱させる)」

**Mohammad Sohel Samad**

学位授与番号 甲第426号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「Enzyme-linked immunosorbent assay for the diagnosis of *Wuchereria bancrofti* infection using urine samples and its application in Bangladesh (バンクロフト糸状虫症診断のための尿を用いたELISA法のバングラデシュ流行地への応用)」

**Tsolmon Bilegtsaikhhan**

学位授与番号 甲第427号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「A Toll-like receptor 2 ligand, Pam3CSK4, augments interferon- γ -induced nitric oxide production via a physical association between MyD88 and interferon- γ receptor in vascular endothelial cells (toll-like receptor 2リガンドであるPam3CSK4は血管内皮細胞においてMyD88とインターフェロン γ 受容体との会合を介して、インターフェロン γ による一酸化窒素産生を増強する)」

**上田 純子**

学位授与番号 甲第428号

学位授与年月日 平成26年3月13日

論文題目：「Prevalence of *Helicobacter pylori* infection by birth year and geographic area in Japan (日本の地域、生年ごとのヘリコバクターピロリ感染有病率)」

**星野 有美**

学位授与番号 甲第429号

学位授与年月日 平成26年3月13日

論文題目：「統合失調症と解離性障害における幻覚妄想症状の相違点の検討」

**大道 美香**

学位授与番号 甲第430号

学位授与年月日 平成26年3月13日

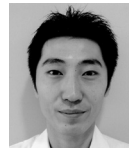
論文題目：「Activated spinal astrocytes are involved in the maintenance of chronic widespread mechanical hyperalgesia after cast immobilization (活性化脊髄アストロサイトはギプス固定後に慢性的に拡大する機械痛覚増強の維持に関与する)」

**河合 浩寿**

学位授与番号 甲第431号

学位授与年月日 平成26年3月13日

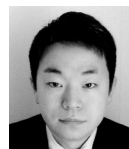
論文題目：「Retrospective analysis of factors predicting end-stage renal failure or death in patients with microscopic polyangiitis with mainly renal involvement (顕微鏡的多発血管炎における末期腎不全、生命予後に関する後ろ向き検討)」

**原田 龍介**

学位授与番号 甲第432号

学位授与年月日 平成26年3月13日

論文題目：「Effects of gonadotropin-releasing hormone agonist on vascular reactivity, oxidative stress, and plasma levels of asymmetric dimethylarginine, inflammatory markers, glucose, and lipids in women with endometriosis (子宮内膜症女性におけるゴナドトロピン放出ホルモンアゴニスト療法が血管内皮機能と酸化ストレス、ADMA、炎症マーカー、血糖、脂質に対する影響)」

**後藤 峰明**

学位授与番号 甲第433号

学位授与年月日 平成26年3月27日

論文題目：「Adaptation of leukemia cells to hypoxic condition through switching the energy metabolism or avoiding the oxidative stress (エネルギー代謝経路の切り替えや酸化ストレスの回避を介した白血病細胞の低酸素への適応)」

**中岡 俊貴**

学位授与番号 甲第434号

学位授与年月日 平成26年3月27日

論文題目：「Combined arsenic trioxide-cisplatin treatment enhances apoptosis in oral squamous cell carcinoma cells (三酸化砒素とシスプラチンの併用療法は口腔扁平上皮癌細胞のアポトーシスを増強する)」

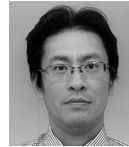


井澤 晋也

学位授与番号 乙第362号

学位授与年月日 平成26年3月13日

論文題目：「The role of gastroesophageal reflux in relation to symptom onset in patients with proton pump inhibitor-refractory non-erosive reflux disease accompanied by an underlying esophageal motor disorder (PPI不応性の食道運動障害患者の症状発現には胃食道逆流が関与している)」

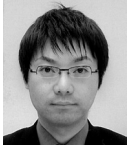


今宿 康彦

学位授与番号 乙第364号

学位授与年月日 平成26年3月13日

論文題目：「Relationship between blood levels of propofol and recovery of memory in electroconvulsive therapy (電気痙攣療法におけるプロポフォール血中濃度と記憶力回復との関連)」



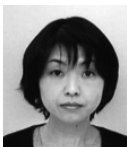
前田 邦博

学位授与番号 乙第363号

学位授与年月日 平成26年3月13日

論文題目：「Glomerular tip adhesions predict the progression of IgA nephropathy (IgA腎症における糸球体尖部癒着は予後不良を示唆する)」

◆大学院看護学研究科



坂田久美子

学位授与番号 第62号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「救急外来におけるトリアージを行う看護師の職業感染と感染予防対策の実態調査」



音川 夏未

学位授与番号 第64号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「就学前の子どもを持つ看護師の職業継続と継続学習に影響する要因の検討」

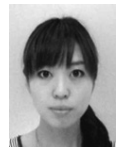


細川めぐみ

学位授与番号 第63号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「精神科訪問看護実践を支える連携とその意味」



山瀬ちさと

学位授与番号 第65号

学位授与年月日 平成26年3月1日

論文題目：「結核病床を有する医療機関からみた保健所との効果的な結核患者服薬支援のための連携」

研究助成等採択者

○公益財団法人堀科学芸術振興財団

第23回（平成25年度）研究助成（一般の部）

●氏名 稲熊真悟（病理学講座・講師）

研究題目 新規シグナル経路GLII-CXCR4による肉腫悪性形質制御メカニズムの解析－分子特異的治療法の確立を目指した基礎的研究－

助成金額 1,000,000円

○公益財団法人大幸財団

第31回（平成26年度）学会等開催助成

●氏名 柴田英治（衛生学講座・教授（特任））

学会名称 第55回日本社会医学学会総会

助成金額 100,000円

○公益財団法人大幸財団

第31回（平成26年度）学会等開催助成

●氏名 渡辺秀人（分子医科学研究所・教授）

学会名称 第46回日本結合組織学会・第61回マトリックス研究会大会 合同学術集会

助成金額 200,000円

○一般財団法人中京長寿医療研究推進財団

第2回（平成25年度）医学研究助成金

●氏名 高島浩明（内科学講座（循環器内科）・准教授）

研究題目 中等度狭窄病変を有する慢性冠動脈疾患患者において機能的有意虚血に与える因子に関する検討

助成金額 300,000円

本学講座等の主催による学会等

【学会名】

- ・第25回日本眼瞼義眼床手術学会
- ・第134回東海産科婦人科学会
- ・日本国際保健医療学会第32回西日本地方会
- ・日本アロマセラピー学会第1回中部地方会

【開催日】

- 2月15日（土）
- 2月16日（日）
- 3月8日（土）
- 4月27日（日）

【会長等】

- 横尾 和久
- 若槻 明彦
- 坂本真理子
- 福沢 嘉孝

第25回日本眼瞼義眼床手術学会

平成26年2月15日（土）ウインクあいちにおいて、第25回日本眼瞼義眼床手術学会が形成外科の横尾和久教授を会長として開催されました。

当日は、関東甲信越地方を中心に記録的な豪雪に見舞われましたが、悪天候にも関わらず、過去最高の参加者数を得て盛会裡に終了いたしました。

特別講演にお招きした信州大学形成外科松尾清教授が、大雪による交通機関のマヒで松本を出発できなかったのですが、急遽インターネット回線を介して、信州大学からのリアルタイム遠隔講演が実現しました。文字通

り「災い転じて福となす」で、画像も音声も臨場感にあふれ、会場には驚きの声があがっていました。

この他にも、眼瞼・眼窩領域の様々な疾患や再建法に関して、眼科医、形成外科医、更には義眼製作に携わる技術者も交えて活発な討論が交わされ、大変有意義な学会となりました。

開催に際しましては、本学関係者及び一般財団法人愛知医科大学愛恵会から多くのご支援を頂きました。

この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

第134回東海産科婦人科学会

平成26年2月16日（日）名古屋市の興和株式会社本店ビルにおいて、第134回東海産科婦人科学会が産婦人科学講座の若槻明彦教授を会長として開催されました。

東海3県から272名の先生にご参加頂き、計6群37演題の発表が行われました。他施設の臨床経験、日頃、経験することがないような貴重な症例報告が発表され、活発な質疑応答の下、盛会のうちに終了となりました。

現在、産婦人科専門医を目指す専攻医は、学会・研究

会において筆頭者として1回以上発表していることが義務づけられています。本会での演題は年々増加しており、これまで年2回1日で行われていた本会は今回を最後に、生涯教育の充実も目的に、次年度から年1回2日間の日程で開催となる予定です。

末筆となりましたが、本会の開催に当たり皆さまに多大なるご支援、ご協力を賜りましたこと心より御礼申し上げます。

日本国際保健医療学会第32回西日本地方会

平成26年3月8日（土）大学本館たちばなホール及び看護学部棟内講義室において、日本国際保健医療学会第32回西日本地方会が看護学部の坂本真理子教授を会長として開催され、226名の方にご参加頂きました。

今回の学会は「豊かな多様性の中で創る人々の健康」をテーマとし、一般演題発表に加え、フィリピン共和国の保健ワーカーやタイ王国マヒドン大学ASEAN Institute for Health Developmentの先生方による講演、シンポジウム「30年先を見据え、底力をつける人づくり」など、多彩なプログラムが盛り込まれておりました。16のNGOやNPO、企業等にご協力頂いて行われた人々の健

康や暮らしに貢献する活動紹介も、学会参加者が情報交換やネットワークづくりを行うよき機会となり、好評でした。

同時に開催された学生部会主催による西日本地方会ユースフォーラムにも、多くの学生の皆さんが参加してくださり、学会を盛り上げてくれました。

最後になりましたが、本学会の開催にあたり、ご支援を頂きました一般財団法人愛知医科大学愛恵会、学内関係者の皆さま、学会運営で大活躍をしてくださった看護学部の学生ボランティアの皆さまに心より御礼申し上げます。

日本アロマセラピー学会第1回中部地方会

平成26年4月27日（日）ウインクあいちにおいて、日本アロマセラピー学会第1回中部地方会が医学教育センターの福沢嘉孝教授を会長として開催されました。

天候にも恵まれ、早朝から多くの学会員及び関係者の方にご参加頂き、この場をお借りし厚くお礼申し上げます。

プログラム内容は、教育講演2題：「低温真空抽出法による精油の有効性とその機能的意義」（塩田清二理事長）、「アルツハイマー病にアロマセラピーが何故効くのか？」（神保大樹統括委員長）及び話題提供2題：「統合医療を実践する女性専用クリニックでのアロマセラピーの役割」（伊藤加奈子先生（同窓生））、「耳鼻咽喉科にお

けるアロマセラピーの役割」（近藤由香先生）を拝聴しました。午前10時～午後5時まで、初回としては非常に有意義な地方会を開催できましたことは、学会関係者並びに一般財団法人愛知医科大学愛恵会及び同窓会の皆さまのご支援・ご協力の賜と深謝申し上げます。

なお、平成26年12月20（土）・21日（日）パシフィコ横浜において、荒川秀俊先生を会長として、第17回日本アロマセラピー学会学術総会（第18回日本統合医療学会（塩田清二会長）と共同開催）が開催される予定ですので、ご興味のある医療従事者の方は、是非ともご参加の程、宜しく願い申し上げます。

命(いのち)の理(ことわり)を知る

生理学講座 教授 増渕 悟
教授 佐藤 元彦

医学教育のグローバルスタンダードを目指して

今年の国家試験の結果からも分かるように、本学の教育は非常に高いレベルで行われておりますが、これは本講座前任の岡田忠名誉教授を始めとする、諸先輩方の絶え間ない努力の結果であり、そして、教員側の呼びかけに答えてくれた卒業生諸氏の精進の賜物であると思えます。私は今年からのスタートですので、この良い流れを継承していくことが大切であると考えております。

医学教育のグローバルスタンダードというテーマではありますが、私のささやかな経験（アメリカ滞在時の医療機関受診）から、あえて「日本の医療は素晴らしい点も多く自信と誇りを持つことも大切である。」と言わせて頂きたいと思えます。確かに、アメリカの医療人たちは非常に親切で優しい人たちばかりでした。でも、何をすることも二言目にはInsurance（健康保険）、そして、大量の書類にサインしないと進まない。プライマリー医やファミリードクターが検査をした医療費の一部は保険が通らず患者に直接請求されるのに対して、専門医であればたとえ高額な治療、検査でも全額保険会社が負担してしまうという一般医と専門医の明確な格差が存在する。救急の看護師は、点滴のラインをとるのに両腕の正中にサーフロー針を入れてしまう技術レベル（点滴スペシャリストという上位資格があるらしい）である。上部消化管内視鏡をやるのに鎮静剤で眠らせてスタッフ7人がかりで1回2,000ドル（内視鏡はオリンパスですが）かかるなどと、驚くことが多く、むしろ日本がグローバルスタンダードになるべきことも少なくないのではと感じております。

（増渕教授）



生理学は、生命事象の機序・基本法則を明らかにする学問で、臨床医学の病態、治療、副作用の理解をする上で必須のものです。複雑な人体調節機構を「分かりやすい」講義で伝えることを心がけています。なによりも、「生理学を理解できる」ことが「より良い臨床医の育成」につながると考えるからです。

高度な専門的な知識を「講義」するだけでなく、講義内容が関連する具体的な臨床場面を示したり、マルチメディア教材も積極的に使用して興味が育つことを心がけています。また、どこでも通用する人材育成を目指し、米国のStep1共用試験用テキストも参考に、英語のスライドも使用しています。伝統的な基礎医学教育の良い部分は大切に守り、今日の生理学教育を実践していきたいと考えています。

（佐藤教授）



世界に発信する医学研究

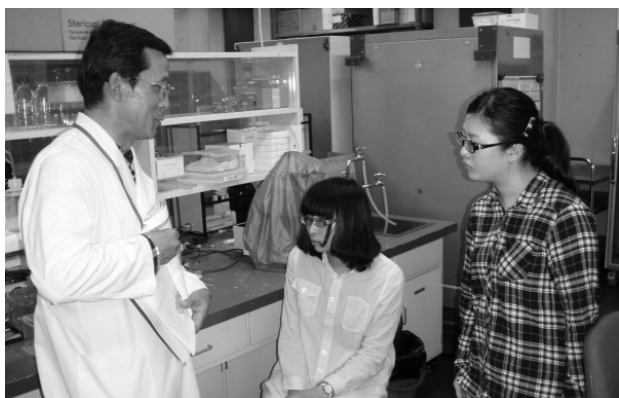
【古戦場からリズム研究の新たなフィールドを求めて】

私は、「哺乳類時計遺伝子の発見」という生物リズム分野にとって、歴史的な出来事が起こった1997年に大学院に入学し研究生生活を開始しました。そして、その後の爆発的な研究の展開の大きな波に翻弄されながら、今までやってきました。

現在、生物リズム発振メカニズムの追及は一段落し学問全体の関心が生理機能、病態との関連に移行しつつあります。睡眠・覚醒、体温、内分泌など、多くの生理機能に昼夜変化、概日リズムがありますが更に、疾患の発症、増悪の時刻、交通事故などのSocial accidentの時刻にもリズムがあることが知られています。また一方、生体リズムに配慮し効果的な時刻に治療を行う「時間治療」も行われています。

私は、理想的な時間治療を考える上での基礎として、がん組織内の分子時計振動構築の解明に取り組んでおりますが、それにとどまらず今後「生物時計と病態生理学」を中心テーマとして幅広い視点での研究を展開することを考えています。

私の専門の時間生物学にとって、名古屋地区は一種の聖地のようなところではあります。名古屋大学の近藤孝男先生を始めとする世界的な研究者が集中しています。加えて、極めて関連の深い睡眠学の最先端の研究・診療が本院塩見利明教授の下で行われており、この恵まれた環境を最大限生かし、教育・研究の実践を通して大学の発展のため貢献したいと考えております。(増淵教授)



【疾病に関与するシグナル制御蛋白の同定と解析】

細胞表面のG蛋白共役受容体は、ホルモン等の刺激により三量体G蛋白質を活性化します。活性化したG蛋白質は様々な分子に刺激を伝えます。つまり、三量体G蛋白質は細胞外刺激を細胞内へ伝える重要な分子スイッチとして働きます。

ヒト疾病の発症・進展に三量体G蛋白質の活性化は非常に大切で、その受容体は薬物療法の主要なターゲットと

なっています。しかし近年、受容体以外に、三量体G蛋白質の活性化を直接制御するシグナル制御蛋白（G蛋白活性調節因子）が存在することが明らかになってきました。

私たちは、酵母を用いた機能的スクリーンシステムを用いて、G蛋白活性調節因子の探索を行っています。これまで10種類のG蛋白活性調節因子を同定してきましたが、この中には、虚血での心筋細胞死を制御するG蛋白活性調節因子（AGS8）、心肥大の組織変化に関与するG蛋白活性調節因子（AGS11-13）など、病態の進展に密接に関与する蛋白があることがわかりました。現在も、様々な病態の調節に関与するG蛋白活性調節因子の同定、また治療への応用を考えた基礎研究を進めています。

(佐藤教授)

【環境生理学と自律神経活動の解析・宇宙生理学】

発汗・体温調節は、私たちの研究室が長く取り組んできた課題です。人工気候室を用いて、温度、湿度が発汗、体温調節に与える影響を自律神経活動とともに記録し、解析しています。とくに、発汗・体温調節障害の病態生理については臨床講座と共同で推進しています。また、種々の疾病治療に応用されている炭酸泉の発汗・体温調節への影響や年齢、季節による発汗・体温調節能の変化なども課題としています。更に、企業との産学連携研究（工学系含む）も多く推進しています。

宇宙滞在中に何らかの措置をとらないまま地球に帰還すると循環系、筋・骨格系、体温調節系、内分泌系などに不具合が起こります。私たちは、これらを軽減するため独自の「人工重力+運動荷装置」で「地上での模擬宇宙実験」を行っています。(佐藤教授)

講座からの一言

生理学は他の基礎医学、臨床医学のすぐ隣に位置しています。本学を始め、学生さんや教職員の皆さんの発展に協力は惜しみませんので、どうぞ気楽にお声かけください。



規 則

規則の制定・改廃情報をお知らせします。

職員人事評価規程等の制定

学校法人愛知医科大学職員人事評価規程及び学校法人愛知医科大学職員人事評価規程施行細則が制定され、本学に勤務する職員に係る人事評価の実施に関する適用範囲、評価方法、結果の取扱い等の基本的事項が定められました。

施行日は平成26年4月1日

事業所内保育所に関する規程等の一部改正

学校法人愛知医科大学事業所内保育所に関する規程及び学校法人愛知医科大学事業所内保育所に関する規程細則の一部が改正され、消費税率の引き上げ時期に合わせて、保育料等の利用料金の見直しが行われました。

施行日は平成26年4月1日

喫煙所管理要綱の一部改正

学校法人愛知医科大学喫煙所管理要綱の一部が改正され、職員等用として設置されている喫煙所について、利用状況及び当面の利用予定等の状況を勘案し、設置期間が平成28年3月31日まで延長されることとなりました。

施行日は平成26年2月24日

シンボルマークデザイン取扱規程の制定

学校法人愛知医科大学シンボルマークデザイン取扱規程が制定され、本学シンボルマークを使用する際の基本デザイン、利用手続き等が定められました。

施行日は平成26年4月1日

大学院学則の一部改正

愛知医科大学大学院学則の一部が改正され、看護学研究科における長期履修制度の導入、収容定員の変更、学納金の改定等が行われました。

また、この改正に伴い、愛知医科大学看護学研究科長期履修制度規程が制定されました。

施行日はいずれも平成26年4月1日

医学部履修規程の一部改正

愛知医科大学医学部履修規程の一部が改正され、授業科目、年次配当、単位数等が整理されました。

施行日は平成26年4月1日

医学部倫理審査実施規程等の一部改正

医学部において、ヒト幹細胞を用いる臨床研究に関する指針の対象となる研究の倫理審査を行えるようにするために、次の関係規則の一部が改正されました。

施行日はいずれも平成26年2月6日

- ・愛知医科大学医学部倫理審査実施規程
- ・愛知医科大学医学部倫理委員会規程
- ・倫理委員会の専門委員会に関する細則

医学研究科履修規程の一部改正

愛知医科大学大学院医学研究科履修規程の一部が改正され、授業科目「感染・免疫学」の設置等に伴い、授業科目「寄生虫学」が廃止されました。

施行日は平成26年4月1日

看護学研究科履修規程の一部改正

愛知医科大学大学院看護学研究科履修規程の一部が改正され、授業科目、年次配当、単位数等が整理されました。

施行日は平成26年4月1日

医学情報センター図書管理規程の一部改正

愛知医科大学医学情報センター（図書館）図書管理規程の一部が改正され、消耗品図書の管理方法が整理されました。

施行日は平成26年2月17日

メディカルクリニック規程等の一部改正

メディカルクリニックにおける健診事業の廃止及び健診事業を担当していた健康管理科の廃止に伴い、次の関係規則の一部が改正されました。

施行日はいずれも平成26年4月1日

- ・愛知医科大学医学部附属メディカルクリニック規程
- ・愛知医科大学医学部附属メディカルクリニック運営委員会規程
- ・愛知医科大学医学部附属メディカルクリニック医療安全管理委員会規程